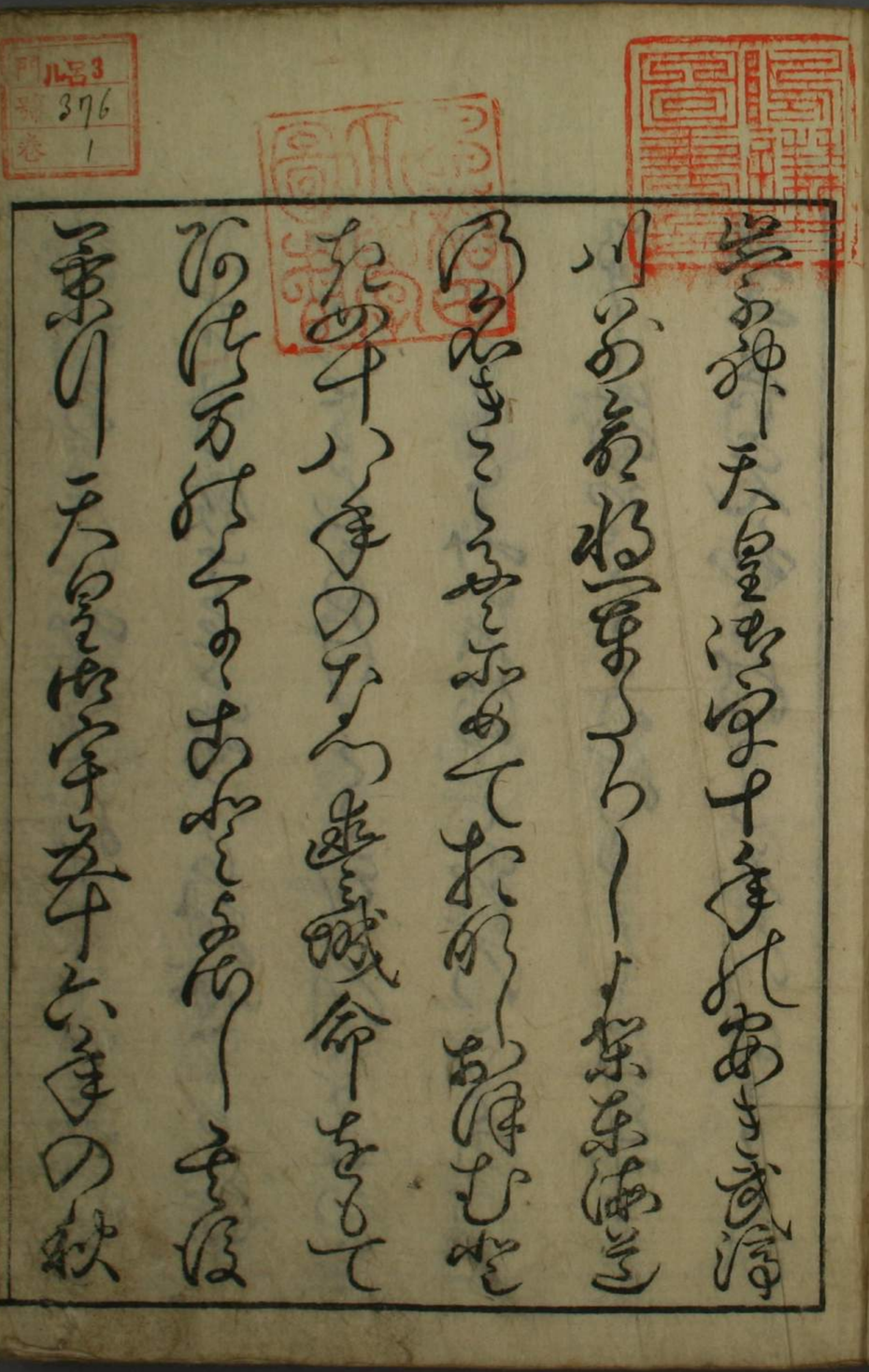
東海道名所圖會 一

ル 3
376
1

門 ル5 3
376
巻 1



[illegible]天皇御宇十年九月あき武蔵
川の[illegible]ろ〳〵と紫雲海を
[illegible]きてこゝをふめておのゝ[illegible]むを
[illegible]八年のなつ遠藤命をもて
[illegible]方をすてあをゝ[illegible]を
[illegible]天皇御宇五十六年の秋

清諸家にみることはうしてふるく
小を考顧をもとめらる雅世こうに
はつとうんあけ〳〵記行こころを
もとくきみ雅清を新乃こゝの付志
る一安理くるあけもしおもしろ
夢老元和こゝのこゝろひ

徳川

みれ〳〵ゐ夢おもゐ清りよもけうこ
あ〳〵かゝ〳〵ふみ志所ゐ立
雅の魂をおゝ和かなまとゝいこ
東明〳〵ゐもく吾嬬のこゝを元
乃乃もゝこゝろひおゞ可ゐ
ゐゐこゝ清ゐなこふ當描〳〵

中山前大納言愛親卿

権法寂主人

凡例

一 東海道は京師よりすぐ発して江戸に到る都て十州に亘て其驛路を標せし名所古跡神社佛院を圖會し次驛を圓圍して其名を題し行程は真下に署す

一 海道の神社を延喜式神名帳に載る所選んで記し郷里おのゝ生土神あるを以て勸請の神祠なれど是を除く然れども大慶の到る所に擁んで戴る寺院も亦あれば准し古刹を擇んで記し末世の墳寺道場の数を際限なくぶれどあまねく省く大略畿内名所圖會の例に倣ふ

一 東海道より五里七里入るの地も亦名神名刹あるを以て舉る所謂尾州津嶋天王二州風来寺遠州秋葉山相州大山寺江嶋鎌倉等なり然れども准に準ずる方位を示すを以て前位に循ふ其の東西の里数の西に所に

あらと雖し或は左の方右の方とも京師より東関に到く旅者の左右なり

一 引書は古来流布の紀行和歌代々の撰集詩賦は名家の文集に據て記し軍談は其要を撮んで記し神廟梵刹の由緣を社人寺僧の記せる所勅命又村翁野夫の話し是あるを載る事あり

一 世に鴨長明道之記同海道記と云二書あり予是を校して長明は兼之五年十月十三日鎌倉に下向し将軍實朝公に謁し法華堂に懐舊の和歌詠し事東鑑に見ゆ厥后又年を歴て建保四年六月八日来秋六十四歳にして卒す此事方丈記に詳に録せり初の長明道之記は仁治三年八月十日京に出るとあり七明示寂の後廿六年を歴て記しあれば多田満仲五代孫従五位下伊賀守源光行の紀行と和歌とを集め入て光行と記せり其拾遺集に書載源親行と署次親行は光行の長子にして元因之に巻中に載せ

光明紀行と記し〳〵長明と記さゞる又海道記も貞應二年卯月上旬
発洛を出立と書るとあれも長明入寂の後七年を歴し訳録者志ゐも
和歌の長明み〳〵祠後人の賛をる所かゝんと書る真ふ辞の風體黒
白み〳〵く長明ふあゝざる事明〳〵ゐ〳〵長明い無名抄方丈記の二書
をり外ゐ〳〵ゐ兼好のほゞ〳〵艸ゐ長明四季物語抔引て其頃の書へ
亡びるゐゝんゝ世ゐある四季物語の二書後人の准似をる偽書ゐり

一 いみ〳〵より古人の紀行名地の圖画道中記の数殆多〳〵後ども
海道懐古今改〳〵く奮書と又ふ惑人事多〳〵予巡行して今時の
見聞ゐ記に猶脱漏い後人の補遺ゐ俟のを

一 画圖い京師江戸及び諸邦北寄合書へ故ふ画毎ふ姓名下章あり
細圖い浪速竹原春泉齊の一筆ふよりて姓名抔記さゞ

御亭

東海道名所圖會卷之一

目録

平安城　洛東風景　三條橋　栗田
日吉　山科　四宮河原　小関越
追分　相阪山　走井　逢坂関
山迫両國堺　蟬丸祠　関寺小町跡　山神森
関清水　関明神祠　関小川　石向山
安養寺　蓮如の石獅子　世喜寺　顕證寺　大津
大津宮　練貫水　及檀道　長等山
三井寺　新羅明神　金堂　護摩堂　唐院　弁天祠　圓満院御殿　任吉祠　安楽行堂　八祠樓　常在寺　閼伽水　三尾明神　御井　三層塔　燈幢石壇　正法寺　尾蔵寺　亀丘　三井十景　鐘　梵鐘　新山王　経蔵　護法善神　新宮権現　熊野権現　食堂　大鍋　寶蔵　殺生仙人　十八神　定窟　大悲閣　迦葉寺　水鏡寺　夜叉　村雲橋　中院　南院　北院　微妙寺　鶴神石　八幡　亀嶋橋　安然石塔　甲尾祠　二王門

智證大師傳獻
友皇子傳

滋賀花園
志賀津
梵釋慶寺
唐崎一ツ松
猿屋
聖女祠 竈殿
竜比祠
八王子宮 拷社
神祖御宮 讃佛堂 金鼓堂
真葛原
奥成宮
石占井
妙見祠

同御影銘
志賀山城
黒王祠
明智光秀城趾
日吉山王神社大宮 春日祠
二ノ宮 攝社
三十六人 影向石
客人宮 拷社
三宮 金岩
同ク祠
大將軍祠

志賀都
滋賀浦
貫之祠
唐崎
桓武天皇御塔 竹臺
波止土濃
聖真子宮 布池堂 橘嶽
夢妙憧石 明星水
下七社
慈眼大師廟
登町若宮二社
若宮
生源寺
小五月會岡

志賀里
滋賀大輪田
崇福慶寺
辛崎神祠 山王系 神供
瞿眼水 竈殿

歡喜石
鼠祠
走井大師堂
八柳
經子宮
西教寺
浮御堂
比良
菊濱 玉造
芭蕉堂 龍ヶ岡
栗津野
兼平墳

和尊和行塚
彼岸木
走井宮
滋賀院
山王系圖
朱迎寺
勾當内侍古蹟
打出濱
大津會稲穂貢
膳所 吾孫君祠 陽光の馬水
栗津杜

大政所 寫院
地藏堂
猿塚
榊宮
比叡山
苗蔡神社
大伴櫻
四宮社
松本渡口 膳所城 膳所町
栗津里

王子宮 靈石
早尾社
塔下惣社
神路山
四明嶽 冨士山遠景
堅田浦
真野入江
精大明神祠
義仲寺 義仲墳 芭蕉翁塚
陪膳濱
栗津松原

雖練石補天鼇足立極潰濁共化成浩劫浩劫
出外環八德大洲浩劫之中生一大桑木延漫
數百里所稱嵩崑風土記適是也此墟曠茫而
無疆令有鼠以東動京坼數百里而有魁者有
夸者有淡者有秀者所稱蘿島子圖繪迺是也
當與縮八荒於赤蹠鼠梟因睫出中者詔賢不
當與躭金玉狗馬玩好而趨勢利者俱焉云

筆山　熊谷尚出識

小朝祥
歌学集
屋の内にはゝ
ちはやふる人の
ちはやふるやみ世の初春
後鳥羽院
公事根源云
関白太政大臣
おゝまろ儀
清涼殿
東屋は四位五位六位
武徳殿
紫宸殿
成通卿
惠所預土佐守光貞

月清

さらしなの屋敷
玉風を閑かて
ゑれ手のにぬる
やとの上ふ

後京極

拾芥抄云
兼明門 高倉戸 紫宸殿の
北屋ふあり 南面門 ゝ

牧業墨記云
應和元年小野道風
殿上あり 兼明門の
額を書次

草薙御劔と申奉りし初の御名は天叢雲劔と申ゆり 倭姫世記曰八坂瓊曲玉
八咫鏡草薙劔之三種神寶ハ皆皇孫ニ授給ひ永天璽と
日本書紀曰 素盞嗚尊出雲國斐川上ニ天降まし給ひ時に啼哭聲國ゆ
あしと見るゆゑ老たる夫婦の者あり其中ニ老人のか女ハ是て捶く悲しむ
素盞嗚尊問給ふ汝達ハ誰ゆゑ斯ハ悲るぞと夫婦答く我等ハ此
所の國神にて脚摩乳妻ハ手摩乳と申ス壯年女ハ吾兒にして名を
奇稲田姫と申る此山中ニ八岐大蛇あり〳〵往ニ吾兒を多く呑て今又来人
殘るもの女も〳〵を呑んとす此ハ吾兒脫免ニ術なし故ニ嘆哀傷ス中に
素盞嗚尊も倶ニ歎たまひ汝ハ大蛇を殺し給へ我ハ妻ニ為せんや
老人大ニ喜び勅ニ随ひ奇素盞嗚尊稲田姫の湯津の爪櫛ハ髮ニ
御髮ニ挿ゆゑ夫婦八の槽ニ酒を盛て待る程其期ニ至て山の震動し大蛇
現れ出て尾ハ岐あり眼ハ酸醬の如し背ニ松柏生て八丘八谷の間ニ蔓
延て頭を上て八槽の酒を飲て醉て眠る其時素盞嗚所帶給ふ十握

劔ハ抜て大蛇をすゝ斬給ふ尾ニ至て劔の刃少し缺て則其尾ハ裂て視
給へ一の劔あり大蛇の所居る上ニ常ニ村雲覆りしを天叢雲劔と號
其より此寶劔人代に傳て 神日本磐余彦天皇 神武帝 神代の蹤を繼日向國
宮崎ニ都し給ふ此時天下草昧にして封域いまだ定ざるに故ニ寶劔を以て
四海を治め初て帝業を大和國橿原宮ニ遷奉給ふ 廢后十二代 大足彦
忍代別天皇 景行帝 二十八年春二月朔日皇子日本武尊筑紫の叛賊熊襲ハ
一舉ニ滅し其國ハ悉く謐ゆゑ方是九州既ニ治て百姓悉く寒を免れ同帝紀四十年
夏六月東夷叛逆のよし奏ス昇 天皇斧鉞を持て日本武尊ニ授け東國
安泰を以て詔あり曰朕聞東夷ハ識性暴強にして淩犯ハ宗しとす
邪神あり郊ニ妖鬼あり路ニ街衢ニ遮て人を害し其賊徒の中ニ蝦夷
尤強し男女交て父子の別なし冬ハ穴ニ宿て夏ハ樔ニ巢て毛ハ衣て血ハ飲て
昆弟相疑ひ山ニ登て飛禽の如く郊を行て走獸の如し撃ば草ニ隱て追ば
山ニ入て人民を略て古より已来いまだ王化ニ深ク今朕汝ニ授て身體

長大にして容姿端正なり力は絶倫にして枉る猛なること雷のごとく向ふ所敵なく攻む
必勝をしいて平かなり則和之體にして五子ありて實に神人あり是を庭に天朕が不敏
と愍ぶ國の不平なる拜謁して天業を經綸宗廟を不易なるべしわれの命なり
是天下を則治ら天下を朕が位を則治ら位を願は謀反深くして遠を慮く暴賊
姦鬼を懷退へしと詔あり久しく日本武尊斧鉞を授て再祥して奏して曰
嘗て西戎を征るの年天威を施して恭然襲を裂を其浸淫辰も絶ぶしく
東夷暴逆次速に天神地祇を祀て　天皇の聖恩を蒙りて其境に際を德
教を示に猶服せざるものあるを忽兵を發して誅罰して四海を溢て
敵を慰なん　天皇弟吉備武彦大伴武日連を日本武尊に從しめ
七掬脛を膳まとして冬十月朔日威風凜々として出陣して半ばに
枉道て　伊勢皇太神宮を再祥して倭姫命に辭て曰今詔を被て東征し
反賊を誅んと欲ふ於是倭姫命寶劍を授て慎ぶべしと
命じ給へ日本武尊打立て駿河の國に至る其地の姦賊陽從ひ尊を欺て曰

此郊に麋鹿あり氣を吞霧の如く足に林の如し尊其言を信じ曠野に入て悠々然として獣の如く
相圖の狼煙を上げ伏野に一度に起て其聖に放火して大兵を塵にせんと尊
驚破謀を知り佩せ給へ叢雲の寶劍を抜て草を薙攘ひ給
て火を消し風忽然として變て賊軍に吹靡て猛火燃ふるに賊兵途を
喪ひ焔に噎て倒れ斃て風威いよいよ強して炎四方に滿々たれば逆賊敗走
討ふ於是草薙神劍と改め其聖を燒はらひ左所に尊直に進んで
相模國を經て上總に至り艤して海上を渡らせ給へ暴風忽起て王船を覆さんと
尊の從者愛妾橘媛宣へ今風つよくして濤沁鯨舟を沈んとす海神の
所爲を願ば妾尊に贖て海に入尊の御身を穩かせんと言訖て瀾の底に入
給へ暴風忽止んで王船は着岸しぬ故に時の人其海を駿水といふ尊は上總
より陸奥に入て假夷の所爲を悉平げ給へ凱陣の所時碓日嶺に至て東方を臨み給
て歎て吾嬬者と宣へ於是國の忘れ難き吾嬬といひ風俗に流れ

都のゑんげ一祇園ワラの
豆のワラ是美頂の初花
咲そひの花ろう地蓋の揚げ
蓋と月久人君とちるまで
貴様の振ひ者山の酥歌
蹴鞠の者は者雙林乃
紀雛子女伶の會下汀
東の生花競揚弓の者
二野茶屋の豆腐切る
者こんみか祇園の御祇
とちでしひ御祇楽の
ゆりあそび
京の水の清さみく
洗ひみがた
美顔と粧ひ
美服と衣とひ
用花ふうう
ゆくも名あの

一種あそび
れ至ってく
清ん所い
奥と衣と
東方先生
喟然と
のさまひ
さひある
を言
あり

夫名劍の德は釋名曰劍は檢なり非常を防檢するの所以なり管子に桓公ふ
むし葛天盧の山を發く金出て蚩尤を得て劍を製て名て劍鎧と
いへり是劍の始なり周官の桃氏劍を佩る厥后楚ふ龍泉あり秦ふ太阿工市あり吳ふ
干將鏌耶あり越ふ純鈞湛盧豪曹魚腸巨闕の諸劍あり漢ふ高祖の斬蛇
あり二尺を捉て天下を取る魏ふ文帝の飛景流彩華鋒の二劍あり是て
天下の名器と我朝は小鴈膝丸髭切御髭切小狐等あり和漢名劍を賞
して天下を治る事古今ふゆゝしき例なるべし

花の色はうつりにけりいたづらに我身よのなかにふるながめせしまに

古今物名

桓武天皇平安城を興基あり遷都ありて結繩の政をもて天下を化成し加之代々の
聖主德を踏仁を詠て上古の風に同じくして群生を撫育し弱くば四海靜
かにして億兆の歎を彌らんと欲す久ふる光度卿曙の記云延喜の帝事に
又ある例なり申めしとなれもてるよりぐハ匈奴殘てるよりぐハ
なり今國のをゝ戸ざゝ戸それて天下卓錐の地すらなきやうなるゝ
いと事なり蔡邕獨斷曰京師は天子の畿內千里日月を象る日月の躔次千里
あり毛詩曰文王都を豐ふ造る穫秦云燕の地方二千里帶甲數十萬これ天府の
國といへり左思が都賦ふ金城の萬雉を建て條の廣路を披き十二の通門を立てう
柞平安京は都て一千有餘歲の都ふて中葉なれも其例あゝ畿內七道は
天武帝の御時勅ふりて定れ其中なれも東海道は冠蓋うり單轅の弧光
煌々たゝく四海の潮は東日ふ照されく浪の若溢て干戈の威日々ふ新なゝく
鳥敢く翔られず賞罰嚴ふゝく虎畏て江府までの往來貴賤と
かく老かゝれくとかく晝とかく公卿は勅を蒙りて玄の使藩屏乃
諸侯は叫は侍く奉勅あるゝ者人の交易斗藪の奈門風騷の歌抗雜綺の
り御伊勢は富士詣まで驛路の鈴れ絶るもかく馬あり牛輿あり舟あり
橋あり泊くは自在なゝく酒旗所々ふ飜飜うり周禮曰國野の道十里に
一廬あり廬ふ飲食あり二十里ふ宿あり宿ふ驛亭あり亭は馬ふ鈴とは宿を
驛路の鈴といへり毎年貢を馬みく運び藏する時は公卿國々乃任

あらて守護ふかくもゆへ門に鈴を付る馬に板もゝ屋の戸を叩く通しけふこゝ彩り
日本紀孝德帝の御宇大化二年に関宿に定免驛馬傳馬に鈴の契を付る事
あり又續日本紀及び延喜式江家次第令義解等に細見へり

旅人の山語につゝ夕旁に驛の鈴乃をやびくなり　養空内省

道細き里の駅は鈴森山ゆうとをる友よりて　為家

神もさぞうらゝる雨ゝ志の駅は駅の花は小板橋さ聲　遊遥院

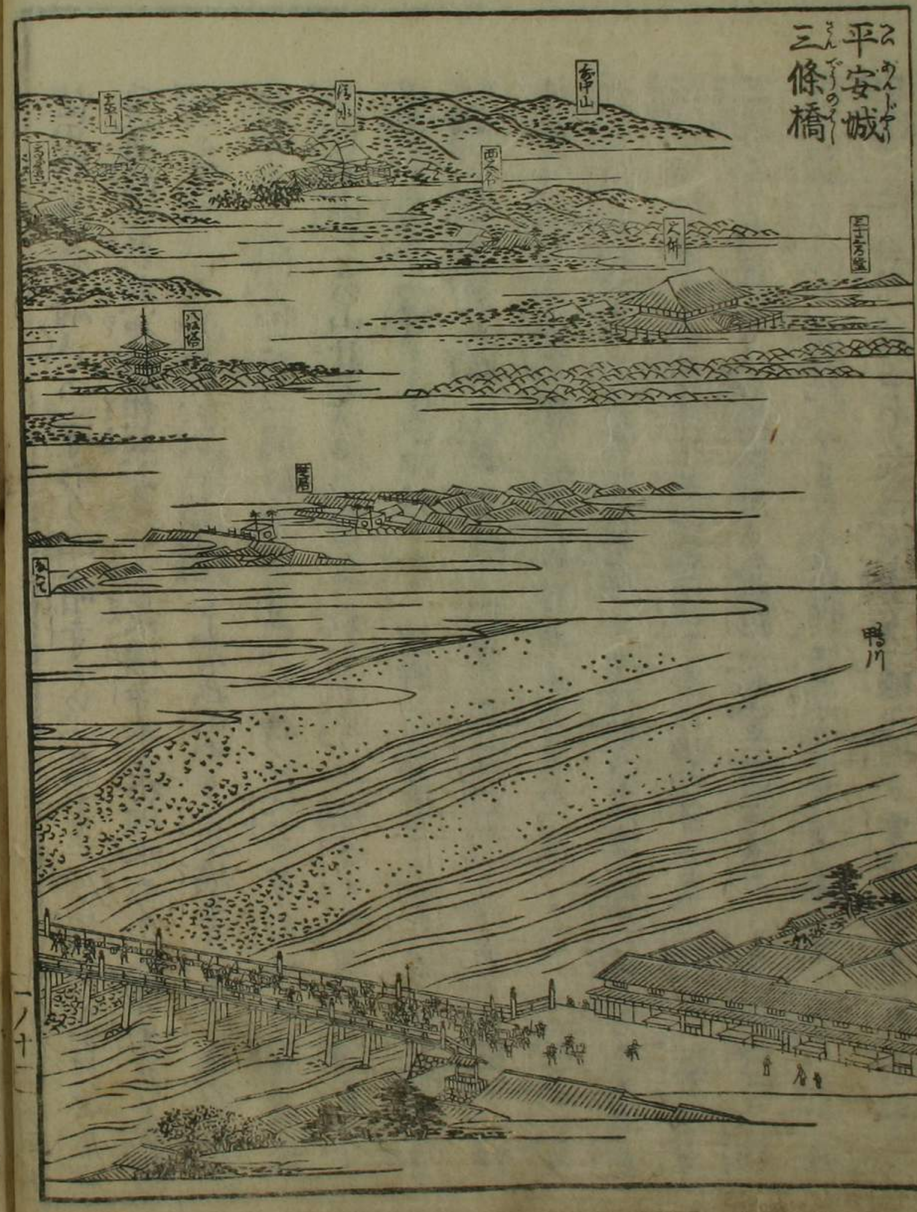
國王七鈴とりけく七道につゝを丹官使に一つ賜ふ之れと下みくむまや法く
毎ふうゝゆゝして宿々に其所を驛法といふ驛舎に京師より江戸まで五十三
驛に洛陽教業坊二條橋に東海道の喉口みゝくに往もあれより負路法に
橋上より洛東の風景に見渡せる本間く神社佛閣烈々く花洛の勝景ちふ
やぐはる橋下の流に水上に鴨皇太神宮御鎮座ふゆ鴨川といふ名産に硯石水
乾ぶして墨色に艶あり又月の況に日々に鑑を漢く調貢しまる至て美味に
艮に台嶺巍然そゝく王城の鬼門と護に悪魔に擬ふ禁に赤山禅院社

一乘寺の隙に松石川丈山の詩仙堂白川の瀧知意山嶽淨土寺に大文字
月待山の禁に銀閣寺あり神樂岡吉田社に神祇官は齊場みゝく
日本の神々に鎮座る其南に真如堂黒谷西に百万遍東に永觀堂あり鹿谷
談合谷松虫鈴虫の古墳光雲寺若王寺五山之上の南禅寺山腹に
駒の瀧山嶺を獨秀ぶゝとりて二條橋上より南を眺るに寿頂山知恩教院
吉山の山亭に四時花に鶯に鶯の囀の嘗吉に牛の妻會山院々みく遊
興に公促に長樂寺東大谷雙林寺の西に居大雅堂跡祇園女郎の祠蹟
祇園社二軒茶屋赤蔽膝祇々園に豆腐切る若丁々に下河原の酥歌
の聲祇園町の待青雲の鬢ばゝ花の顔嘉祢の俤り花香芳句に筒井筒
いづくも共に扶かゝぬ紅葉の色は小町紅清風まゝ〇く表襲扇九ツ十乃
うかねをと名の柏ふくんくやんとゝ繭奇喜に曙友に祝る四条河原の
夕涼禪の形茶の深帷子若の肌をうれや一力見の見ゆる顯員組芝居に早雲
花矢倉縄ひふ雨止地蔵尊建仁寺の陀羅尼の薩六波羅蜜寺向ひ鐘

六道救化の南無地蔵安牛の金比羅桂ゝ地菊溪菊水牛王祠寺い桂乃
ゝ〜拉七観音ふ伽羅の像八坂の庚申八坂の塔高塞寺の姥桜幽艶ふ萩
の花霊山の樓閣より洛陽の萬戸絳之者部山西大谷三寧坂経書堂
仲光寺子安の観音東金馬止免ちしより清水寺ふ至る地主の桜音羽
の滝南の水京清ゝ九取南の方式奇中ゝ清閑寺とゝ九市の丹楓要石
豊國山阿弥陀峯継信忠信の石塔三塔社東谷小松谷とゝ法然上人
旧蹟の浄刹あり是より苦集滅道渓谷こゝゝ科ゝく大津へ出る往還之
大佛殿ゝ天正年中秀吉公の御建立あゝく盧舎那佛谷安〜樓門ゝ
二王の大像門ゝ金色の高麗狗あり古豊國の社ふあり〜と称又南手石
塔婆あり世俗秀吉公の古墳と云傳へ大鐘ハ南方回廊の外ふあると千二間
堂ゝ蓮華王院とゝ一千躰の観音ゝ安置堂前ふ秋海水池の面の燕子花
濃紫の色鮮〜ゝ仏前の灯観之渡堂ゝく大夫数あり諸侯の家臣まくに
朱く射術と様を東ふ妙法院法親王の御殿あり日吉社看積院岩源院

池田町ゝ梵論ゝこの寺あり明暗寺とゝ其南の柳園ハ松永貞徳居士
の遺蹟之新熊野社新熊野観音泉涌寺ふ泉涌水あり又佛牙乃舎利
紫名高〜　帝王皇妃の御陵も當ゝふあり東福寺ハ藤原氏の菩提
所ゝ〜〜開基ハ聖一國師五山の其一ゝ初ハ地名ゝ月輪ゝ歸九條
関白兼實公の山荘ゝ仏ゝふ月輪殿下と号ゝ嫡孫大相國光明峯寺
道家公禅法ふ帰〜ゝ仏地と聖一國師ふ寄附〜南都東大寺興福寺
と今く東福寺と歸ゝ通天橋の紅葉ハ蜀錦の如〜北殿司虎開の表伝
も仏寺ふ住〜思因池の龍圓柏の庵朱等名所多〜ゝ三の峰稲荷社ゝ
元明帝和銅四年二月初午日出現〜ゝ延喜八年勅大政大臣藤原時平
三条の社と修造ゝ永亨十年ふ社と山下今の地ふ移ゝ南ふ源草ゝ寶塔寺
石塔ゝの九百羅漢の石像極楽ゝの洞跡ふ昭宣公の古墳あり元政法師の住所
伏見の桃山大和大路を北へ出ゝ五条橋ゝの東院の古蹟離ケ嶋離カ嶋
年頼寺佛光寺の覺寺ゝ〜条の橋上より一眼ふ遮く寂平安京の佳景あり

九山
燈王


平安城
三條橋
東山
鴨川

東二條の森は方
世ものこと寅の刻
ちうんうう 吾妻下り
江戸ぢり 伊勢
きうりの坂迄ひるど
日岡際上の茶店ふ
集ひく酒莚と侘
めるハ 儀別留別の
符牛と送るも
多ゆりた
旅立やうへ日の昇ふ
足送りく
こうげ盃を
持け上り
はたらく

洛陽二條橋ハ東海道の首なり　鴨川をわたり白川橋あり東の方ハ青蓮院
市門跡粟田市殿金蔵寺の二猴堂本比叡粟田天皇墓頂山ハ親鸞聖人
植髪の像あり抑墓頂山と号するハ法華経玄義ハ墓頂佛種と云へり
中華天台山の最峯ハ四時花絶ずまれも又墓頂とかゝれしの謂なり
あるゝん将軍塚ハ墓頂の高嶺ハあり天下ハ兵害あるゝん時ハ鳴物とゝ成ん
小鍛冶宗近が水火秀ら塚日山神明宮東岩倉大日山ハ此の土ハ製しゝく
陶器師あり赤ハ粟田焼と賞ず洛上の清水ハ牛馬九吾妻ハ有り時
関原與市と討く勇威と称ひ日岡峠ハ木食上人あゝハ菴ゞむをんぐ阪路
を平ゝゆゝの人車牛ハ慈藍ハ施ず焼ハ震千本松松坂と云ふ目景
の阪路と其ゝ云ふ市廟聖あり　天智帝山陵ハ御狩ゝ時忽然
らゝく昇天あり市尚の落止る所ハ陵を建ゝり　廟道の儀ハ
人馬系ゝ　ゆゝく　ゝ　ゝ　ゝ

浄土寺とゝ〳〵禅師を開祖とし次そ〻ゝ久〳〵荒廢せしを天和年中真慶
法印とゝ〳〵人ゝ中ふ住職に〻〻人異相の道人ゝ〳〵ゝ中ふ素性なし　堂舎ゝ
明正院上皇霊廟を感想〳〵ゝひ明暦元年ふ再営ゝ〳〵ゝ二重の高閣ゝ建
ら是得月楼と号く則宸書の額あり上皇時々ゝ幸海〳〵て山水ゝ愛〳〵
閣前ふ組冊石ゝ布く風聲ゝ下をゝひゝ石上をゝ仏菩〳〵ゝ中尊阿弥陀
佛へ　浄陽成院の勅願ゝ竹が鼻地蔵寺ゝ播州網干龍〳〵ゝの盤桂禅師中興〳〵
ゝひ本尊地蔵菩薩ゝ弘法大師の作ゝ仏ゝ宮村廻地蔵ゝ小堂皇の仏ゝ〳〵ゝ
本幡里ふ今の六地蔵　ゝ〳〵ゝ成平清盛為先法師ふ命せられ京師の廻ゝ勅ふ建ら是
〳〳　毎年七月廿四日六地蔵　めぐりとて都鄙群参次　四宮川袖くべゝ〳〵ゝ有ゝ古ゝ市場あり
拾王　あられ〳〳ゝ有ゝ山も世ゝ〳〵ゝ世ゝ〳〵ゝ世ゝ〳〵ゝ

走井

やうこの名水の具して炎暑の時へ煎り茶に煎じ用ゆる四時ほう溜くして甫出し清冷耳味あり

走井ふ

ちかくの

涼や

ちり紅葉

逢坂山関の小町

四のみこうせ
あるあるへふ
はしめて
風うくみ

業集
七夕ようの
ゆふしめ
あるは風や
まつこめふさう
めりとおりへて
小町

大津絵をひらしちふ
墨絵にて着
棲こまあ初
しよりう今
小其筆勢
遺りて古雅
あり成名れ
と賞ぞ所
あらん
下河邊維恵写

大津絵の
筆の
ちらし
行俳

逢坂山
関明神
稲丸祠

蟬丸
木庶受
廣重

蟬翁妙曲起驚風
散入黃鐘六律通
莫管聲明今古說
琵琶湖上解絃中
秋蘿嵩

走井　逢坂大谷町茶店の名物なり　しらく　暑ふ　堪難　拾遺

走井のほとりをゆくあふさかの関しらいとゆふかけの駒　清原元輔

家集

逢坂のかけ樋の水ふかみゆくゆくさくらの木葉の上の木葉くくり　東屋

旧

走井のかけ樋の旁にたふひけしのせうふをゆる冬月の駒　仝

百菓堂　走井茶屋の前　小町百菓の像　安次　作像を尺右の小屋たふ極楽往生の相　晩秋堂　旧ふ　古雅　笹原薬師　西笹原　薬師と称す

逢坂関　旧跡は逢坂山の峠より少し東上り原町尼寺の辺り　文徳実録曰　丈徳天皇天安元年初て逢坂関を置く　寺十二人　寺門より双闕　衆二十人　兵具　厳重に鎖す　金剛力士の如く　怒の眼を張り　双ひ居　旧記ふ　足くらう　関守十二人　小天皇　兵士の獅子　今ふ　於く　清水町に　漏塚氏　真　兵士家の末裔　一説あり　いまへの関は神の支配　山家　正徳年中　寺門と　祥瑞に及ひ　山寺も　紙しるり　氏は　探丸の　隠士　山相坂ふ　探丸に　仕へ　新関　逢坂山の　新関を　建て　関守を　小今　山内十　清水　尉　古　今　百今

蓬山　蓬ふ　守つ　あふ坂の関は　あさにたち　紙　名　郎　在京元方

拾拾

逢坂は東路とこそ守つ　山清　くしの関ふ　そ　有　名　左京大夫道雅

新勅　相坂の関ふ　ふ　あ　ち　人の渡　と　ぬ　れ　出　花　乃　白浜　後京極摂政

後古　逢ふ　る　み　ち　中山　秋　あ　く　又　遠　さ　ぬ　あ　そ　う　の　せ　き　定家

後拾　お坂の関の秋むしの音清くとのある所代と長いきふくり　長賀宮人

新後撰　横雲は峯ふ別れてくあふ坂の関鶏れ者の聲を明ぬる　源清兼

後千　今ふ　ま　と　戸　さ　ま　や　ち　ま　ぬ　旅人の乃　ち　ち　世ふ　逢坂の関　藤原信

新後　逢坂の関れ秋むし旁古ちく立ともふ人ぬ夕ぬけれ駒　侍賢門院　越川

後古　ふ　ひ　け　る　駒　の　ふ　ま　と　ま　ま　れ　仏の道　あ　あ　坂の　せ　た　伝都源信

旧　逢坂を　就　た　た　果　ぬ　秋　風　千　末　こ　を　お　り　人　白川乃　を　き　寂蓮法師

新後拾　あ　い　そ　く　就　初　る　あ　あ　坂れ関や旅衣れ　昭　ぬ　る　ら　ん　平政時朝臣

右馬頭　以　秋　の　ち　た　ふ　ま　ま　ま

年おやくがさのくるとうぞうぞうしゆ
さうくんのうわときさてれば
ひんたくこのかくりつふさ
おどろくものそうねいそうるもせふあくさうれぞたへゆるぞ
心ゆうこんたさきりゆるうときこゆ行成
わくさうくこえやとた関をれぐるもかうひどあけてすけとの
こあうーうどもそーあの俗邪のきこれぬうをさうはたそうゆひくさ
のちくろいゆきくこそあくさうれくそもそ成ふ
うるぞこうろーとうそ色ゆ

函谷関

山辺両國堺

山城近江の堺と成ふ大津絵又平ふ住く書加しく寒盤に一里塚彩色善くに付ハ
等々絵ハ土佐又平ふ住く書加しく寒盤に一里塚彩色善くに付ハ
山城の名沈の側世ふ名高し原ふ付細工人の家糸東六条ふ大きあるに付ハ
其側あれた沈の側汁と云ふ東本願寺建立の時
逢坂山の禁ふ名沈と賜ふ公命ふ云ふ付作物ふ依
逢坂上大谷町左側ふ有り探丸霊と称ふ御祭五月廿二日

蟬丸明神祠

后宮

探丸の事次ふ見く

関寺小町蹟

相坂庁原町阿弥陀堂成り又清水町の石ふ地蔵寺といふあり寺に
見沙弥小町影像清水町影像定らるるに
家集

小野小町

日くーーのかくゆ里の夕れい風より外ふとふ人そあた

百ちとの花ぬもとく秋の空ふありひそそ女ぬとかやうめそ　仝

わるふかくふたうに牧ふ世中ふあ豆ほれの目ちくかけ・ん　仝

壮裏記

二皇五帝の妃も漢王周公の妻もいやで公驕とかさで衣ふ錦繍とかさで口ふ
海陸の珍味ふてのく身ふい蘭麝とかーーーふ和ふ成ーーく美ふ男成
賜くのと思ひでーー女御更衣ふ成とりーー程ふ十七そ毋とーかひ十九
そ父ふとれ兄ーふく兄ふ別ふ世ニそ寄とさたそーーかと草孤童家の嬢人
と成たのむーとふふたうたーみーーうつるさうーー日毎ふ裏ぬやうるうーー顔年
くふとてーーつ汚とりけるたびひも跡くのとちーーーーふ家ふ破ーーく
月のこ空ーーくとこ。産ふあれく蓮生ーーばーふ去るとそふありうれで。
文屋康秀参河掾ふふ

古今

ワひめれ身とうたふ業の孫とたくちそれれあーふいるんとそあり人

小野

と詠く次貫ふをちゝれゆく[illegible]ふ。果ゐ聖ふをとゝ〳〵る。人間のあうさゐ

あれゆく新り屋し

清輔袋草紙云 小野小町之事見王造云文書生涯世襲其姓王造氏也小野者住所之名歟或人云件世襲記者弘法大師所作云小町者貞観之人也彼王造壮襲記者佗人歟

無名抄云 紫式部日記に云の枕ゐんとそをたふとよ色くあ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ

人もうゑはべりぬべきあしだちにて、
ものしるべくたのもしく二年まふ園寳房の阿闍梨とて、老僧ぞひやうと
其和とものしれどさうもなくて、
のちいまだ人もなくて、
なくなりぬ。
あまりのあぞうもれる人のうたてとうく建暦のそのこ十月廿日
あまりの比、二年寺へゆく。あぞうこんこく。
法師しくもる人も、
つくづくんとくもあひくゆく。関寺ようへ、三二丁ぞうゆく。
みちようきこのつくふをこうちあげれる石ふ一丈ぞうかるいしのこう
あるそのこうのあんぐへ三段ぞうゆく。
むうのせたのたきの水をかくてうやうこうん。
いはいこのもうへまうこく。
もどど。昔のあぞう。もうげふうひくいうふるんおぞ信しゅ阿闍梨

ひくいこく。ぶしにむうひくれうふうをひそぞふたる
家。ちくまて信ゆ。あれ人のをかとはもく祢どいうたもたで人乃
井和ふへあくさうなかうとぞ。ひうゆ信し

寺門ふおおく應安の回記をえくふ園寳房の名かし甲具ハ亡滅せしゆえ清水の跡ふ
ゆふ本文の歌今さぞふひうゆ雅しゆ器清水町のひうゆ名
道坂上行原町右の上方ふあり山ゆ大津清水町まぞの生土神ふ

関明神祠

例祭 立月廿四日 神輿一基 清水町御旅所へひうゆ

ふ神二座 一座ハ猿田彦命又道祖神 一座ハ稚九ノ重紙ふ祢

法華

ゆれやこのゆくもひくるもひうれてゆるもゆるも相坂乃関 採九

新古

秋風ふあひく清水のをゆとふそく志ゆのあを世中 仝

同

世中ハそもひくてもおかしくて宮もひくもそてしかれを 仝

後古

逢坂の関のあくしゆをけしふ立わそをる世ふ拾んやゆ 仝

逢坂ふ関の水作とやハひうしの塚月のひのひうゆ変のあやふ信しゆ。

曾坂ふ関の水作とやハひうしの塚月のひのひうゆ変のあやふ信しゆ。

おそふ神とうりくをこ祢ゆべしひもうちをゆるたようふこれひうし

ふうくさのみうどの沖使ゆく。和泉ゆ。ひふ。良岩。宗貞。ゆ

とくかうひろんやどの事やぞおもうげふうやひくぞうくこそ伝是
をれぞ緑丸の姓氏祥ふ志〜是ど式部卿敦實親王 宇多帝の皇子 の糊色ふ管弦
と常ふ嗜ミ琵琶と善〜自流泉啄木の曲を愛〜〜敢くこれ成人ふ傳次
世成道是 會坂の関ふ菴を結んぐ山居〜る平生ふ弄ぶ琵琶と無かひし号次
緑丸頭い幸ヲの必く體い僧ふ似さうはの人道士とひひ仏ぐもの〜 博雅三位
かの流泉啄木の秘曲と弱ろんとく山居ふ通ふ事ニ案ふ逮てある時風雨頻ある
和其ふ〜流の切ある成感〜〜く 秘曲と弱ら次偽〜事ぬぐ江談ふ見ハ〜ろ
緑丸の秘曲ふ延喜帝の皇子〜〜ハ育人と似且ろ事 其證祥ろ〜ば 緑丸ろ
異ある道士ふ〜く世の塵埃ふ染〜ば無心の境界ろれを育人〜〜似且ろ事
いろれをたふ〜もめ〜〜次 又博雅い 延喜帝 皇孫ろく 親王克明のろ孫ろく
関小川 相坂山の南溪より流出 出る小川ハ 大津ろく 吾妻川とひ
新千載 水ふ入
立ぬろ成お坂のいー法り関乃小川ハ花の名ろ〜〜 家隆
金葉 逢坂山お系ちろ〜〜 會坂の関ハ小川ハ綿とりかく 後鎮
ろ向山 お坂山の小関ハ祥の後とろ〜〜〜〜
ろ〜〜 神祠ある〜〜〜〜

千載 紀貫之成南ろ祥ふろ向ろ〜お坂山成ろ居ふ〜〜〜〜 雅俗山雲寺
支木 ろ居ふ川ある〜坂山のさろひ形ろろ向の祥ふ我かいを先ぞ 仲正
安楽寺 小坂所ふ在ふ寺〜〜長吏ふ属次 開基 行證大師
本尊 立阿観音 長吏ふ大分育證大師の祇ひ〜緑丸ふ成次
蓮如上人名跡石 上人ふ従ふ襲れ近れ寺ふ見ひ〜〜ふ成次
開清水明神祠 清水町ふ在ふ関ハ祥ふ法世准ハ物名
世喜寺 月街の左の山ふ在ふ拾芥抄云関寺本尊弥勒志賀の郡にあり いまハ藍
魏々〜〜〜て三井ふ属ふ別院ふ中に忘心傷部しまに復ふ 今ハ消ふ成
本尊ふ阿弥陀 牛塔 當寺ふ牛ふ本尊弥勒の地ふ在ふ初ハ関ふ建立の時 牛ふ運ハ
併ハ安次 大津寺内ふ在ふ西本願寺 弥勒のふ〜〜〜〜 傷成ろ
近松山願證寺 蓮如上人ふ従近ハ御坊と称ハ
本尊阿弥陀佛 長吏ふ親鸞聖人画像 蓮如上人ふ 聖徳王七高僧 蓮如上人貴二世
傳云寛正六年の春本願寺第八代蓮如上人 洛東大谷ふ寺 成〜〜時 成ろ
親鸞ふ石 住〜〜堅田ろ〜 長吏ふ 大津ふ 蓮如上人 所〜〜ふ
類〜〜〜〜 長吏ふ 大津寺 〜〜〜〜 寺門五部所の内 近松寺ふ 三井寺成
の悪徒ふ〜〜〜〜 蓮如上人 〜〜〜〜 西本願寺 親鸞
聖人の真影十ヶ年余當山ふ安置ハ其後ふ科門堂〜〜〜〜〜〜〜〜

牛塔

近松佛坊
世尊寺

大津宿座所のにたれ
曙の月のかげ
春乃
春泉画

屋

大津 近州

京師より初の驛なれども東海道東山道共に東国二十八州の関西なれども東国なれども恒東なるべし 東海道五十三里半餘 東山道三里半餘 及び淡海國中の舟船 京都へ交易の町数九十六町 諸侯の蔵 屋敷多し

我金陵さゝなみ山のうつもれん志らぬ大津をそとる白浪 淡人志賀

秋の日もかゝれ山のゆみち寒い大津の里ぬぎすゝ人 隆祐

新六帖

閑就くゝられもつる大津馬とのゝ一いれたいそくあり 和泉

大津宮 日本紀云 天智天皇紀五年是歟京都之鼠向近江移 同帝六年三月辛酉朔巳卯遷都于近江是時天下百姓不願遷都諷諫者多云云

拾玉

若狭山ふゝき嵐をゝ入日をそ大津の宮の花園 大僧正慈円

支本

さゝ波や大津の宮小月をみゝ見ゝてゝ保ゝ柳中 貞淳

大津皇子 天武帝皇子 日本紀云容止墻岸音辞俊朗也 天智帝に愛せられ長ずるに及んで文学あり 先文筆を愛し詩賦の興大津皇子

ゝ津ゝ此ゝ是時分

日本詩賦の初ゝ

懐風藻 春苑言宴

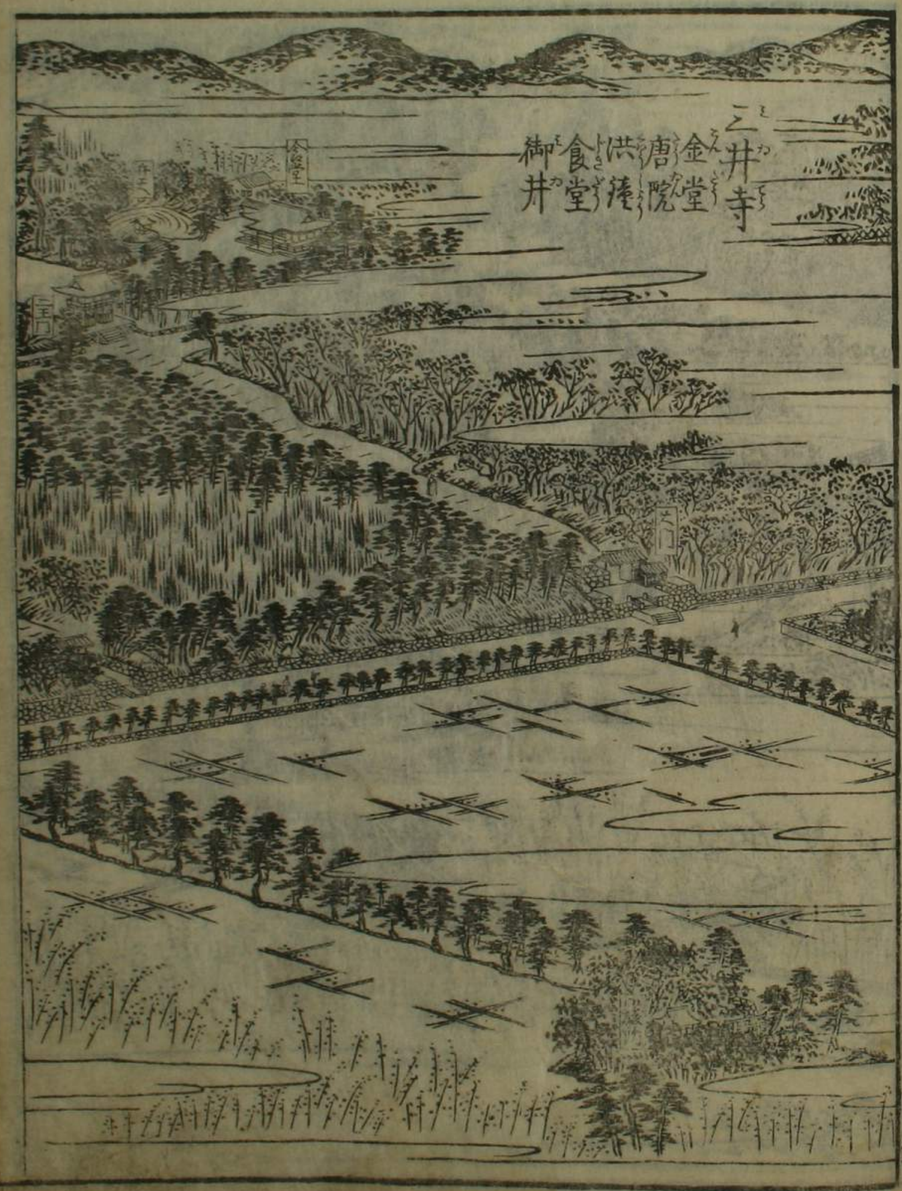
開衿臨霊沼遊目翫金苑澄清苔水深晻曖霞峯遠驚波共絃響啼鳥與風聞群公倒載帰彭澤宴誰論

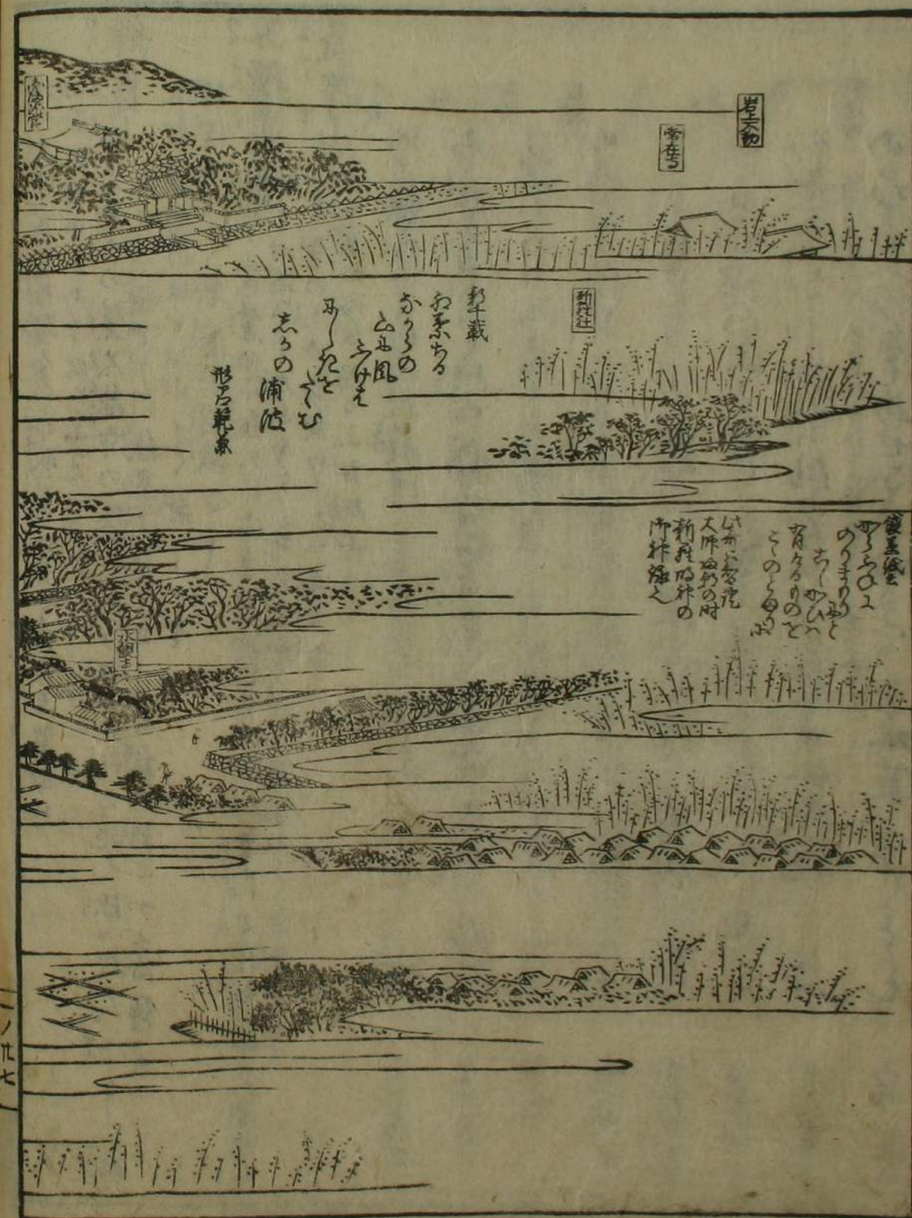
大津皇子

大津宮の舊蹟今の布政司の北ゝ志賀都に

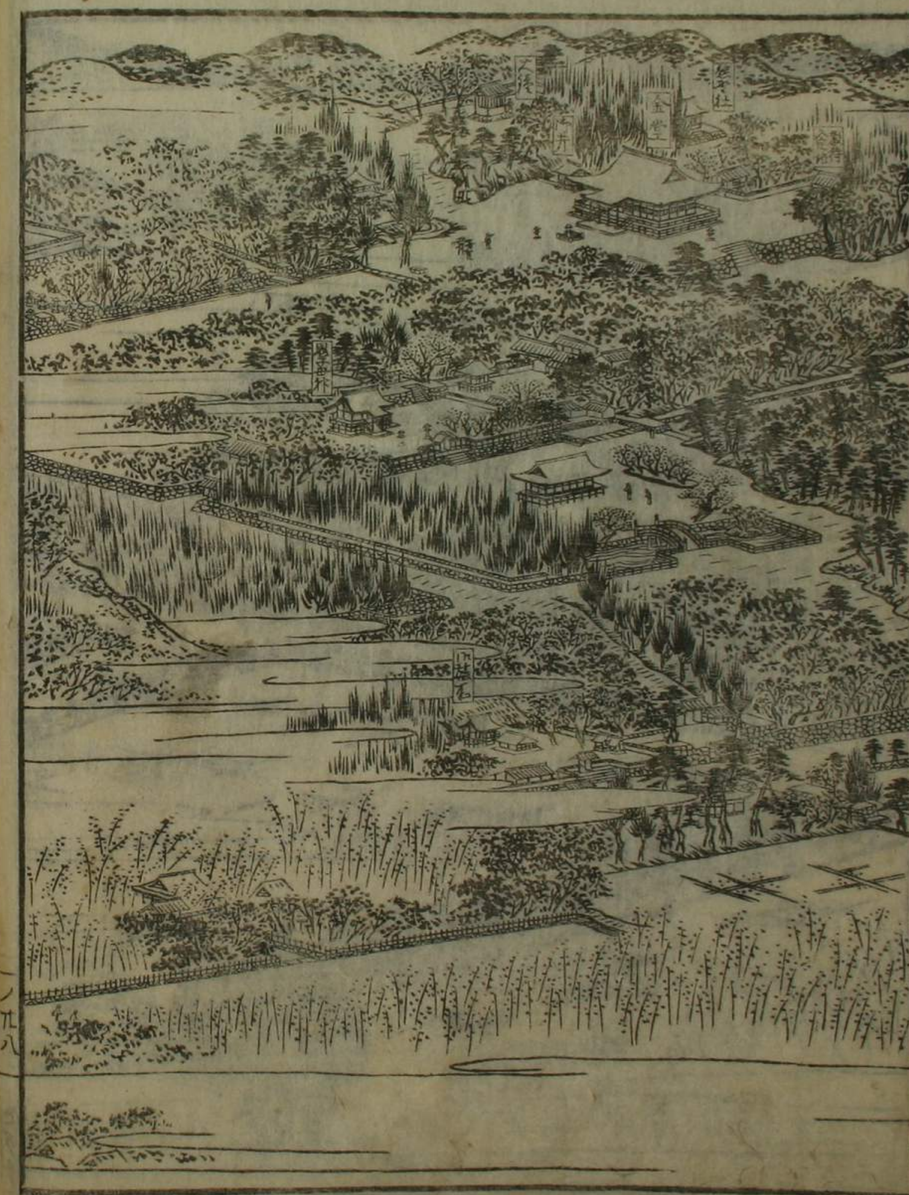
旧跡志賀里に あり沢下に 見へ

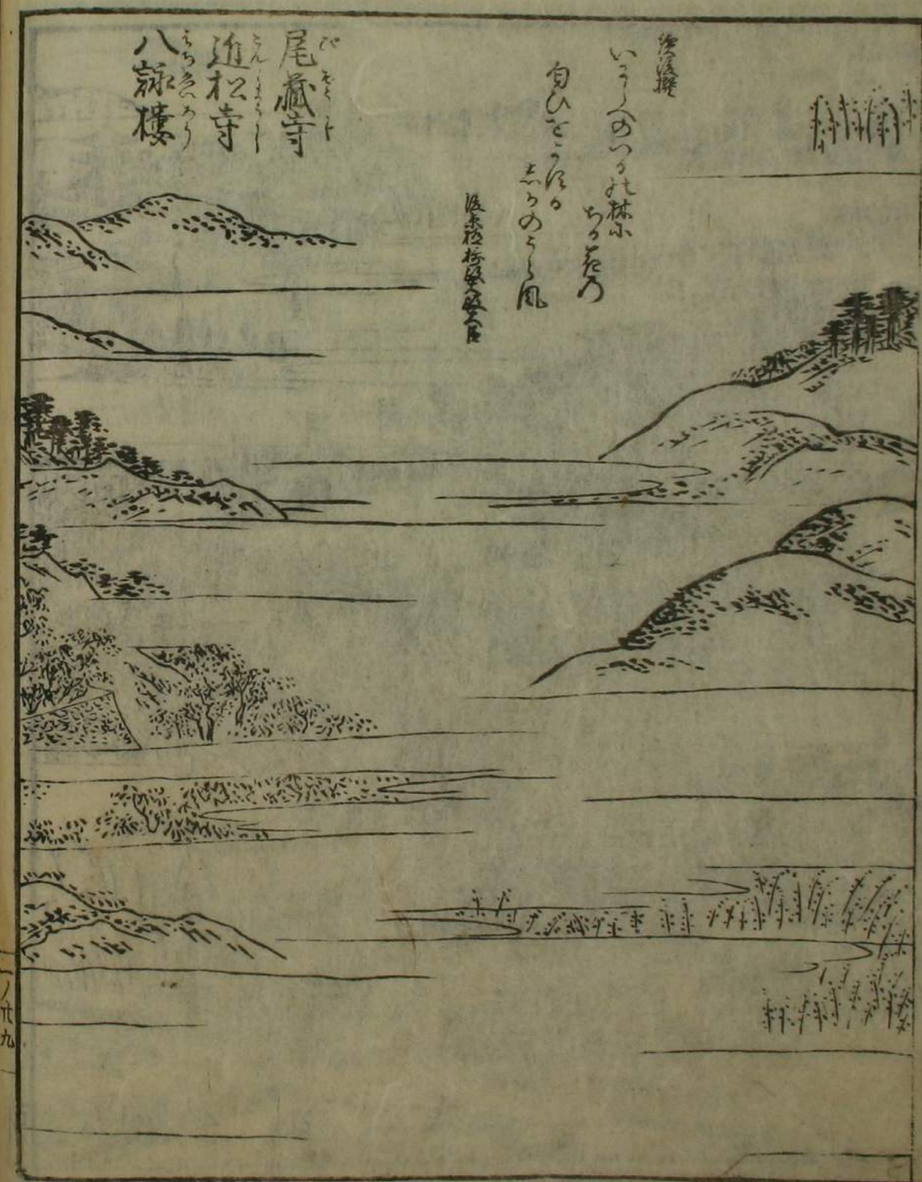
練貫水 三井寺の禁大練寺の境内に 練貫水金字 あり 方一丈計の池 深サ 尺 上 ゝ 舘 ゝ 舘 ゝ 舘


三井寺
金堂
唐院
洪庵
食堂
御井



三尾社
唐院
奥院


金堂
經堂
一九八


いうしのつるむ林小
白ひとこえ
ちるもみぢ
尾蔵寺
近松寺
八嶽樓

淡海八景
三井晩鐘
湖面朦朧晩畫
不成音響高
闇出園城霞
問好友李瓢
月十倍楓橋
半夜声
ちゝはゝの焼香
三井の
入あひの鐘
近衛関白時熙公

長等山園城寺（志賀郡にあり、名三井寺又寺門と称す 天台宗俗験道なり 熊野人結縁）

ながらみやこ三井の古寺ひかりあれとむかしふりぬる賀茂の宮人 玄四

玉葉

かつらもてこぎ渡りしの水のそこふかきみ陸さる三井の清水ふるき月新 道珠

清水抽

源ふたつ流の若しそ表あれゆ人いさひしさ志ゆれ山寺

文當山寺原　天智帝第五の皇子大友の殿舎なり莊園城邑の地なれば

園城寺と號ず抵園精舎紺園化城なども比をるべし　こん気初同帝六年

大和國龍門宮より樂々波大津宮に遷都ありしは日七年　天皇崩

第弘慶しく崇福寺に建立し金堂丈六の弥勒佛を安置し其翌年又

園城寺に新築創を（寺門傳記第六曰崇福園城俱天智之御願皇子大友一年故崩矣　詔而創両寺分位同等也就中崇福建立魁園城）

天智帝の遺勅を蒙り大友皇子の追福のため崇福寺に他へ移し

園城寺を再営し彩色されより殿堂巍々壮厳玲瓏ちらく給孤乃

布金しかる其頃敬待仙僧あり練り貞観元年の天智禅大師

ふ見く傳法に授與し東北の石窟に入定し其より大師入唐して天台山に

登り清涼山に除を文殊の靈跡を尋ね同元寺を龍宮に石泉石橋に

巡り顯密二教を究め元年唐に帰朝し　清和　光孝　陽成三帝

の戒師と成賓祚延長と行ひ国家泰平を護る方法を會れ曉に朝し

寺門の繁昌益盛と長等の山嶺に入相の鐘に丹穂て秋乃月も

佐々波に流れ皇胤累れて驕奢の怒あり　もあ沒沒沒若の源三位

頼政に為の擔ず平家の暴逆に伽藍に弊せられ行尊らあさぢ原子詠嘆

らんと述懐を詠ず天地光を山河の更を龍虎年々に茅屋腥し衛

右大將頼朝卿に當山より牒狀を捧ずに平家没官の地を寄附し

寺東鑑に見えしるあり平家物語大原記にも別々に見えて世の

人口に膾炙仏寺の高僧記に延暦寺より一百餘年魁ずく奥基

あるしを者れ三井の古寺と称ずるも宜なるべし気家初　天智帝

逆臣入鹿を戮ず其罪陳を悔やく建宮あり東當山鴻基

の始えとなり考へられる

○新羅大神社　寺門小院小谷にあり五社鎮守の其一に貞観十七年有元大師の勧請　貞和三年足利尊氏再営

祭神素盞嗚尊　相殿一般若童子　宿王童子と安置　右に火御子祠あり　新羅明神の神像を鎮座　天皇等身の神像を鎮座

の三男成　新羅三郎　義光と号す

社傳云　文徳帝仁寿年中有元大師入唐し天安二年六月八日に帰朝の途路に発し八日十八日西刻素盞尊出世に到る　勅を蒙り初め此鹿館にこもり

新羅明神の高僧の教法を護り　大師奏聞し　勅を蒙り　文殊成安菩薩神代の

上洛の時此神の出現　本地堂に五字文殊成安菩薩神代の

其後之社に移る　大師本地堂に五字文殊成安菩薩神代の

時素盞嗚尊　五十猛命と三尊成仏し　神霊の地に止る事

神秘あり

○三尾明神社　南院琴緒谷にあり　例祭三月中卯日　神輿三基本地堂に安置

祭神　赤尾白尾黒尾の神　赤尾成本神　黒尾八神護系　玄三年三月十四日湖水

かゝ白尾に大変年中に現ず　黒尾に山鎮坐　八大竜王　八大竜王

ら現ず　其古跡成大波止と云　社傳云　三尾影向石　社頭に

赤尾天照大神　黒尾新羅大神　白尾白山権現

○護法善神社　入門の側にあり　五社鎮守の其一　毎歳四月十六日例祭

祭神　明星天神　仏日如人　諸仏千菩薩　子菩薩

本地堂に観世音成安菩薩

○新宮権現　同所にあり　又名新日吉社　法華院天喜二年　建久伝正

明尊　御信仰　文暦應年中　足利尊氏再興

祭神日吉山王　新宮一就小山王二宮　因常立尊　五社鎮守の其一　例祭

五月五日　神輿二基　寺門境内大津西之町々の生土神　五社鎮守の其一

○熊野権現　金堂の側上畑にあり　五社鎮守の其一

○金堂　寺門中央にあり本尊弥勒仏　長七尺八寸中華南岳大師・仏法護持

の尊像　本朝欽明帝御宇初て渡る仏像　本朝の最初　春湯に

○御弁　金堂の側にあり天武特統三年開闢の時　三密瑜伽の開闢

用ゆ故に御弁と　尊像　会の暁成就

基に弁天女皇子の清所

○梵鐘　金堂の側上畑の地にあり　高サ五尺五寸　直四尺　厚サ五分　龍頭

佛殿後龍宮門入りしら延喜の比藤太秀郷　蛇を退治し　能官

太平記云　文保二年三井寺　鐘を撞て

○寺門傳記云　秀郷　開中

寺門に凶事ある時は金鐘山に於て撞秀郷　開中

寺門に凶事ある時は金鐘山に於て撞秀郷　開中

龍去く○を見ふ声を聞そる事元の如し又建武の法ふ逆賊の
集ふく地中ふ埋む様地中ふ埋む様地出しく寺室と成る当山什寶校品の中ふく
此梵鐘ふ出一と云

○食堂　金堂の東ふあり本尊釋迦仏
赤梅檀毘首羯磨天の作

○唐院　金堂の南ふあり初ハ唐房と号ス傳法灌頂の道場なり寺記云
昔和泉帝の勅をうけて青龍寺ふ擬して中央脊證大師坐像弐尺九寸　左黄不動尊
唐の青龍寺ふ擬して中央脊證大師坐像弐尺九寸　左黄不動尊　右
御脊大師斗栖中央ふ同し　其不動明王之弘法擁護の尊なり其ふ
見ハ見ハ即其像ふ写し　共に大師の仏像
と云　続く見ハ見ハ即其像ふ写し　共に大師の仏像

護摩堂　唐院ふあり長日寶祚
祈祷しく護摩ふ修す

三層塔　唐院ふあり本尊釋迦三尊仏ふ諸初ハ大和國比蘇寺ふ
あり　御當家に及んで　命ありて此ふ移す

新山王神祠　庵院ふあり貞觀二年の長大師
勅を奉くして勧請ス

寶藏　庵院ふあり大師將来の諸聖教ふ傳法灌頂の室器ふ
藏む什物寺門傳記ふ見へしるし

△大日覺王寶冠　一頂
△阿難尊者草鞋　傳云尊者七歳時鞋　一足
△尊星王菩薩像　一軀
△釋迦如来加護沙羅　一條
△灌頂法器　惠果義操法全三師相承灌頂　一具
右五品唐青龍寺傳法阿闍梨法全より智証大師ふ附與ス
△灌頂三摩耶五鈷杵　一具
△五鈷金剛鈴　一口
△白色佛舎利　粒々大如拇指

其外寶仏寶器數品あり

○十八神祠　南院ふあり護伽藍神と云ふ貞觀十七年
大師勧請祭神ハ七仏經の文ふ附記ス
伊勢　大日枝　十禪師　客人　三宮　八幡　賀茂　住吉　春日
平野　石尾　武氏　香取　鹿島　江文　冊生　兵主

○辯財天祠　金堂の西池の中島ふあり壇験新あり
小院ふあり宝昭院隆覺僧正の
勧請ス

○住吉祠

○燈幢石塔　金堂のあふあり天智天皇潛龍の日蓮ふ入鹿ふ誅し其罪根
を悔く伽藍を創し真法供養を修せしの遺跡なり又金堂
内陣の三燈ハ中央仏法繁榮ふ擬し左ハ朝安樂ふ擬し右ハ国土豊饒ふ願ふ
湯ふ入く三燈ふ
挑ぐと云

○經藏　梵鐘の側ふあり尊氏將軍一切經ふ藏む自筆の奥書あり
又慶長七○ふ唐本一切經ふ毛利輝元寄附ス

○教待仙人入定窟　金堂の東北の側ふあり教待ハ神通延壽乃仙術
弘教の處なり其後伽藍の東北石窟中ふ入て僧ふ成り其時百六十二歳
と云　本朝神仙傳　江談抄曰之年の教待ハ一百
百年ふ及ぶと云ふ　容顔壯年の如し
して多白髮ふ成の
蓮華と云ふ

○圓満院御殿　寺門境内にあり　聖護院宮　圓満院宮　實相院宮
此三所門跡なり　三井の長吏なり

○安楽行堂　山院蓮華谷にあり　地蔵　弥陀　釋迦　三尊仏安置
有護大師の建立

○正法寺　南院にあり　初メハ聖願寺と號し世俗巡禮観音　或ハ
高観音とも称す　西国巡礼十四番札所
本尊如意輪観音脇士　寺門傳記云　後三条院御願寺なり延久
四年の建立　後三条帝御不豫　月に星の如く平癒せ給ひ御手大僧都
御願寺　始て奉る　一寺と建　金色等身如意輪観音像安置
しく　勝事なり　忽日に成就　しく　御願平癒
或云　正法寺ハ初メ南院山上にあり　文明九年三月朔日大震の瑞異
なりしく　今の地に移る　男女の信人繽紛の落し　そぞ

福神石　正法寺奥院にあり　石塔婆角石俵石の
三石をいう　由緒詳なし

大悲閣　正法寺本堂長の方にあり　方三間半　慶長十年建
近江の八景眼下にあり　中秋の月賞　晴天あり　沖の鳴　竹生島　かど遠に
眺めつくす　銀満碧空　賞　貫くの高閣なり

三井寺登覽

何來天地動玄陰落日樓臺試一臨
秋入九江波蕩漾雲連三越氣蕭森
湘靈鼓瑟思無盡楚客吟恨竟深
不識關門風兩夜幾人操曲遇知音

周南

○近松寺　正法寺の西の方山腹にあり　古ハ近松谷に百二十六房あり
三井五別所の其一なり

本尊千手観音　金色長さ尺三寸　智徳大師の作　額に高観音堂
世人正法寺と　観音堂とも　高観音とも　あり
なりの俗称あり　像に阿弥陀堂　岩光寺　本尊の操開　芙蓉仏と
いう　又堂内に恵心僧都の作　千躰仏　安置　鎮守に護法　若狭　弁天　稲荷
金比羅　祭る

八詠楼　観音堂に隣る高楼　近江の八景　悉　人　つ
中秋の月　墨客　に　霧　流
を　別所系図の一　絶妙の　賞ぜん
なり　又菩提樹　樓あり　世に名高し

安然和尚石浮圖　南方山上にあり　七層石塔婆　五大院先徳安然
和尚と　鎌に當寺に安然の練り　幽閑の所　獨鈷
則入寂の地　山頂　東に高嶺　故に水を　一日和尚試に獨鈷
とり　岩頭　出る　寒暑に渇せず
御鈷水　名づけ　寒暑　のめり
蓋　今存ず

○尾蔵寺　近松寺の少ふ　三井五別所の其一　角基　香龍大師中興
慶作阿闍梨　古ハ尾蔵寺谷に八十坊　今僅に九房存ず
本尊十一面観音　弁天　胴体に昆沙門　足に大黒天　故に
三面観音　称　笠脱　観音　ともいう　むり　人群　なし　ハを
も笠ぬげ　奥名　西の方を所　慶祝阿闍梨入定の
地あり　傳云　寛仁三年十二月廿二日入定　年六十五　寺門
合尾八幡宮　尾蔵寺の鎮守　足利尊氏小脇出陣の時　霊瑞あり　故に造営　祭礼
流鏑馬　歳　伊勢　源頼義　勧請　慶祝
○微妙寺　関山のふ尾蔵寺の西ふ　三井五別所の其一　角基　慶祝
阿闍梨むり　九十六房あり　今絶ふ五房存ず

本尊十一面観音又某師作云安置されいむ〻志賀寺の重仏なり〻
志賀寺ハ崇福寺ハ又如意寺の本尊観音なり〻後世又
北向不動堂内に安置されハ智証大師七度加持の尊容なり
園城寺四方ハ仏尊体を安置す其中の一躰なり

○水観寺　寺門惣門の下路の小ふあり
三井五別所の其一なり
本尊某師作と安置寺門傳記ふハ十一面観音と記す
開基大僧正明尊

○常在寺　三井小院惣門の外新羅社の西ふあり然堂三所権現を勧請す
寺門五別所の其一なり
本尊釈迦仏を安置開基大僧正行尊当寺西ふの山上ふ千石岩と
名巌あり昔岩上明神と称す

○早尾明神社　名在り西ふあり山王中七社の内早尾明神の勧請なり或説云
早尾ハ貴布祢神なり又此社の下ふ石不動尊あり寺門四方
鎮座の其一なり　山北ふ懸あり三筋ふ流れ
不動川とひしまい御水ふ入

○外寺内寺外神社堂閣多し　繁にしるしるふ略す
安ハ寺門傳記ふ見へたり

○亀岳　寺門協内ふあるむ〻教待仙人考ふ奥鬱を含し其孤骨積く
岳のめし迦くあれ共見を
形ふ似たり故ふ人呼て亀岳と云
蓋茅代ふ毋父かさ〻く見ゆ亀のとうあれのみぞ
○亀嗜橋　亀岳のとうふあり教待仙人亀鬱の孤骨ふ流を忽稜く
橋を連く常故ふ此名あり　樹下の流ふ奥鬱今ふ多し
○村雲橋　寺門のおふあり傳云智証大師小嶽寺門〻ゆ寺〻時
此橋上とおるふ西の天に火氣あり大師疾曉して曰今唐の

青龍寺ふ火災の羅あり〻〻橋汁の流水と奥好〻〻あの方〻〻〻〻〻〻消〻〻忽
大師あれを見て成く西天ふ〻〻〻〻風の〻〻〻安〻〻〻〻〻〻

承和五年冬乃月大聖明王感見志
嘉祥三年春乃夢山王渡唐乎告給不
文德天皇宣下志天唐求法被許幾
天台山乃大中七年尓天入南道尓着尓氣里
清涼山仁登天波大師乃聖跡礼拜志
長安洛陽廻津々文殊乃靈地乎巡礼志
西天唐土乃師仁遇天勝地名跡場乎踏美
良諳和尚乃開元寺梵文漢語乎窮多利
法全闍梨乃青龍寺一乘心蓮花開久氣
南嶽天台遺身塔五瓶智水雨灑
石象石橋見渡志天無良不空影像院
顯教密教學東天銀地金地毛修行志幾
自宗他宗昔無幾在唐凡曾六筒年
歸朝乃波仁波新羅國経論章疏千餘軸
清和天皇元年仁権化乃善神影嚮須
新渡乃法門千餘軸大師歸朝志給
爾時大師奏聞志勅宣下利天弘未利幾
百六十年行遊留三井仁唐坊建給不
園城寺仁天波勅仁依里生身弥勒乃附属浮津
仁壽殿仁波詔乎羨氣王宗叡僧正灌頂志
金光明乃齋會仁波臣入壇始利幾
清涼殿乃決疑仁波身護子迦葉乎拉志幾
清辨物登勢須法清路迷比天不知程登留
八熊野山乎攀志時利
尺乃馬飛來
三所乃宝前仁
權現
道乎示曾奇特奈留
一乘八講修世志加波

松堺扉乎押披幾
賊施乃幣帛乃妙乃色
和尚乃恩德不限良
西山松尾大明神
東門中心天王寺
陽成天皇敬比天
亭子天子貴比天
天台弟五乃座主登志天
園城弟二乃貫主仁天
一切經論三筒遍
諸尊傳法二百人
五百餘人髪乎剃利
王臣道俗歸敬志天
千里万里波掌呂
門弟怪美問志加波
良諳乃遷化乎遠久見天
元璋禪師加去志日波
圓載入海世志尅波
時仁此等乎聞志人
後乃日宗人告志仁曾
寛平三年冬乃天
十月二十九日仁曾
天乃音樂雲響幾
圓寂乃後弟二日
大師頭乎撞氣志仁

感實仁甚志
醍醐乃妙味乃希乃色
門第必十憐波牟
乎遍志問荅遍
詞乎殆免置久
権少僧都仁補任須
法眼和尚仁令叙世
最勝講於曾殆免置久
金剛薩埵乃告登演不
三世十方胸仁在里
德行天下仁充滿利
三千余人戒授氣
三部三密珠瑩氣久
大乘小乘鏡美懸氣
三十三年法弘牟
二十四年戒授氣
三年七十八仁志天
生年七十八仁志天
大涅槃仁波入給不
菩薩聖衆室仁滿千
定印結天滅仁入留
三衣乃枕乎替志加波
門弟涙乎流氣利

一事毛不違信乎取留
驚幾怪美疑比幾
涙乎流志天悲比幾
声乎舉天曾悲泣須留
鐘乎鳴志天諷誦志氣
良諳乃遷化乎遠久見天
元璋禪師加去志日波
圓載入海世志尅波
時仁此等乎聞志人
後乃日宗人告志仁曾
寛平三年冬乃天
十月二十九日仁曾
天乃音樂雲響幾
圓寂乃後弟二日
大師頭乎撞氣志仁

延長五年冬乃季　天皇勅宣　志給天　大師弥於彼下　志氣

○智證大師御影銘　廟塔在二四明嶽ノ東一

雙瞳遠瞻　奇骨欽崟　覺月現相　夢日繫陰
花頂歩石　英聲振金　識良謂滅　山瀛阻深

○大友皇子傳　懐風藻出此書天平勝寶三年淡海三船所撰也三船者大友皇子曽孫葛野王之孫池邊王之子也

淡海朝大友皇子詩二首

皇太子者淡海帝之長子也魁岸奇偉風範弘深眼中精耀顧盻煒烽唐使劉德高見而異曰此皇子風骨不似世間人實非此國之分掌夜夢天中洞啓朱衣老翁捧日而至擎授皇子忽然臣平生曰豈有如此事乎臣聞天道無親惟有人從腋底出來便奪將去覺而驚異具語藤原内大臣歎曰恐聖朝万歳之後有巨猾間釁善是輔願大王勤修德宜不足憂也臣有息女願納後庭以充箕帚之妾遂結姻戚以試之皇子博學多通有文武材幹始親万機羣下畏莫不肅然年二十三立爲皇太子廣延學士沙宅紹明呑雅許率毋木素貴子等以爲賓客太子天性明悟尚愛傳古下筆成章出言爲論時議者歎其洪學未幾文藻日新會壬申年之亂天命不遂時年二十五

五言侍宴一絶

皇明光日月帝德載天地三才並泰昌
万國表臣義　五言述懐一絶
道德兼天訓鹽梅寄眞宰羞無監撫術
安能臨海内

大友皇子の詩藻　日本紀ふ文藻皇子詩賦を作る事は園城寺皇子の古蹟手ずからかを魁しく風藻あり手ずから大津ふ初めと書に流ふ初めて大友大津ふ大津皇子ふ初めと記せるものあるべん乎

志賀都　古歴志賀里西郡村ふ所前内と云字しく廣さ弐町四方新水涌出る事しく田畑の中ふ作れるしく旧都の跡ふ神社仏閣古塚ふ考へ紀を見るまし

上壇の地あり出ふ所ふ

然しく旧都の跡ふ神社仏閣古塚ふ考へ紀を見るまし

其地のわれ哭ふ慈ふ見るべし

日本紀云

景行天皇五十八年春二月辛丑朔辛亥辛酉近江國ニ居ニ志賀ニ三歳是謂ニ高穴穂ノ宮一六十年冬十一月乙酉朔辛卯天皇崩ニ於高穴穂宮ニ時ニ年一百六歳葬ニ天皇於倭國之山邊道上陵

前王廟陵記云大和國山邊郡上總村東陵一箇所アリ然レ共一決シ難シ

古人示和礼有哉樂浪乃故京乎見者悲寸　高市古人

万葉　感傷旅宿作歌

千載
さゝ波や
志賀の
都は
あれにしを
むかしかほなる
山桜
かな
俊成

仙台の侍藤原
忠度ハ平家
方ノ武将ナレ
ドモ和歌ニ
名アリ俊成ニ新古今
千載集ヲ撰ビ
タマヘリ
行暮て木の下
かげを宿とせば
花や今夜の
あるじなるらん
旅ニ出テ
ハ千載ト言ヒ
タマヘリ
この歌
とぞ思ふれ

文鳴 画

志賀里（三井の小小四村あり 家数百 西郡正興寺）

王業　神よいふ郡の月に旅衣くおりひや出る志賀古里　藤原定家正忠朝臣

支本　楢の花やいりとの花ゆ〜ん香〜そむ〜の志賀古里　光明峯寺関白

滋賀花園（志賀里 新左家成）

千載　さ〜浪や志賀の花園こる波に荒れ人乃心成そ〜ゆ　祝部成仲

新古　あをそらゝ志賀の花園梢ふる波に風ん吉乃ふるさと　摂政太政大臣

新千　文本守あたさの家さふひさて荒もをし〜志賀花園　定家

志賀山城（滋賀里 赤塚ゆ 愛宕峠と 山中里 白川村と 志賀山城 京師ゆ出る志賀成 山中城と云）

古今　山ゆよ風ゆをさる志賀山みゆ流もあくぬ紅葉ゑ〜ゆ　春道列樹

同　白雪の新もワ〜ゆ志賀の山ゆそ〜ゆ　紀秋岑

後拾　榊花乃みえぬまて散ふゆ〜いくゆ志賀乃山ゆく　猪成之

新千　白ひ雲の風の役を枝打ゆく花子城切志賀山みち　法中定為

滋賀浦（文集の浦より 幸侍 及ひ下坂本 北敷辻の 巡ゆその浦と云）

拾遺　さ〜波や志賀乃浦風いそ〜ゆ寄ゆうちけ源〜ゆ〜ん　右近衛公任

後拾　みゆ〜そあ〜をの海ゆ〜ゆ吹〜たゆ〜人志賀乃〜風　伊勢大輔

新古　志賀の浦やをさゆ〜ゆ波寄ゆ〜ゆ氷て出る月明志賀　家隆

彰後撰　志賀の浦ゆ松吹風のさひ〜さふ夕波ちとゆ立ね鶴や　雅中納言公實

王業　志賀の浦や対面て渡るうき雲に之上の山そ半ゆく絶　漢人志〜代

続後撰　あ〜坂の山城そ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ　後京極摂政

新千　昔ゆ沖の小嶋ゆ旅衣ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ　法中定為

彰拾遺　志賀の海乃白ゆ〜ゆ花の波ゆ上ゆ寄ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ　家隆

彰後古　志賀ゆ浦や湖ゆ沖い寄ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ　後鳥羽院

滋賀大梅田（今さゝゆ〜ゆ）

後古　ゆ〜ち人の汀ゆ氷ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ　寂蓮法師

志賀津（今さゝゆ〜ゆ）

後拾遺　乃ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ　関院摂政　右大臣

一ノ三十九
下河邊維恵

黒主祠

志賀新宮ふあり山地の生土神と云

例祭両度六月朔日九月十六日

祭神大伴黒主の霊と云る 古今集六哥仙の老人なり其序ふ曰

おほやけものの歌めしいそのかみ

かけふやそくるがとし

古今

ちはやぶる神のいさめ川原の名たてつるとは人のおもへや 黒主

おなじ

ちはやぶる大伴の名もはくふみるとも

いひそそのかれくるまとそきくかのるふ仏つけて

ゆくすゑ

則崇福寺と號し多くそれらの後湖水のめぐりに神波と稱ふ
山あり水あり〳〵

續日本紀曰 天平八年八月乙酉以近江國朝書法一百卷施入崇福寺 類聚國史曰

同史曰 同年 弘仁六年正月崇福梵尺二寺禪居之淨域伽藍之勝地也

四月幸近江國滋賀韓崎便過崇福寺大僧都永忠護命法師等率衆僧奉迎於門外 皇帝降輿升堂禮佛更過梵釋寺停輿賦詩群臣奉和大僧都永忠自奠茶奉御施御被即御船泛湖水國司奉風俗歌舞五位已上並據以下賜衣被史生以下郡司已上賜綿有差

延喜式曰 崇福寺傳法會料一万束修理料五千束

太平記云 むかし志賀寺の上人といふ沙學勤修の聖なりけり遠く彼土異の生宅を出て永く九衢の塵刹を望んと願ひしかど富貴の人と見えしも義中の快樂と思ひ容色の妙なるを愛しても速ひのおれ着想と憐む雲と隣乃栄の居をうつしうつと住なれぬふるさと捨しかど松風吾く成ふるまの有ける時上人茶屋の中に立出くるを一昔の杖とさて眉ふ八字の霜とされつ

湖水波をのづからふ向く水想觀と成くんぬを尋ねて来る人立ひしる所ふ京極の御息所志賀の花園の墓に寄せ給ふ御消息しるく御陽をあらるる御車の老尼ふ成あげられるふ上人御見ふ見合せ給ひ〳〵せくおぼえ給ふまつくたまへるうつ遥ふ御車のあとふ見送りて立たれたる有ひとも多る方もおろかられば栄の居ふ立帰く本尊ふ向ひまつりて親念の座の上ふ妄想の化のを立そひく称名の聲れ中ふたくうる大息のを捨ける物もあるかぐさむるもやと思ふの雲とかうむ思ひいでんもうたまひ閑窓の月ふうをゆげば志とあるひふ成ふ〳〵今生の志念つるふ離まじとん後生の涙ふ成められば和ひの姿ひの姿ふ見ふ御息所ふ一端ゆくんを見とく涙袖ともせざりとひく上人狐裘ふ鳩の杖とはさかく〳〵京極の御息所れ御所へまく鞠のつれ〳〵のなふ一日一夜を立うけ給の人をれいるかは俗り者ふ問しる人ゆくんとあるやむもかうるふ御息所御簾の内ようるふ御遠ぜられく是いうさ為志賀の花見の〳〵るさふ問と

足あんせさうしゝ云じるをみてやおいをそんをれゆくふ間よりぞ後世のほとを待う
身の上みゝ岩へさよ桜わゞ〳〵嶽ぞうの云れ繁ふなさけ紙かけば
かぐさむんもこそわ是と云て上人これ〳〵とめされ〳〵ばつかゝとるひ
て中門の翠簾のおふひざまをいて申出るゆもかくけちゞ〳〵ぞあた
ゆひる仰恩所いろうあゝ入寄あのをれゆもゝおそろ〳〵くも
おぼ〳〵めされれば岩のごくある仰を紙翠簾の内ようゞ〳〵さし出
さをゆひるみ仰をふやうつた為
初そるあそひれ〳〵のみて歳をにとゝうたゆゝく年の緒
とよ為と名れいやゞくみやたをとうあくだ
おくらく社のうそかれそちと繁ハわれとゞ彩くゆゝくたのを
中柱されく登のんをぞかぐさあゆひる物る道仏恩園の聖人苦修練
りの尊宿ゞゆもちげゞたい殿仏修りの道あうゝを

今志賀赤塚村ふ建福寺の旧跡ゝゝく文通ゝゝく浄土宗の寺あうゝ又南阪本ふ
崇福寺の旧跡ゝゝく盛安寺ゝゝて天台宗の寺あうけ寺の縁起ゝ瑞應山

崇服寺慶〳〵く後朝倉義景の家臣校若盛安ゝゝて者天文年中再興
〳〵く盛安寺ゝ没むけ寺ふ志心侍郎の孫陀と称ゝ又塔ふ崇福寺の
あうゝく庁祇仏脱ゝ都て慶寺の旧跡をそ行ゝく新寺仏創る事世ふ多〳〵
観者あう都て慶寺の旧跡をそ行ゝく新寺仏創る事世ふ多〳〵
ゝ〳〵ざ仏ゑ〳〵

梵釋廢寺

寺門傳記補畧云長等山東の麓其古蹟ゝゝい
始造梵釋寺云云高僧記云 延暦五年春正月 後勅 於近江國滋賀郡
天帝釋各長五尺 天皇等身之像 植武天皇 延暦五年春正月 後勅 於近江國滋賀郡
十五大寺其一寺ゝ梵釋寺ゝ近江國志賀郡 延暦五年正月 建立之
同十一年 近江國水田百町 勅施入

明智光秀城墟

志賀赤塚村の北方ふあり拾遺
六月ふ慶次盛安寺ふ明智左馬助 籠る天正十年

唐崎

幸崎又韓崎ゝも書に
大津より小武里ふあり

千載 古今物名

波の花沖ゝゝさたてちりくゝ水の底ゝゝ風や成ゝん 伊勢

彩古

楽ゝ波や志ゝの幸崎風浅ゝ〳〵ゝ沼よゝる志ゝのゝゝ寄 基家卿

新勅

ゝゝさたの浜ゝ真砂のゝゝる中ゝ底の余波ゝゝゝ〳〵ゝ 法性寺入道前関白

後拾撰

ゝゝさたやゝゝる沖ふ雲晴ゝく月の氷に秋風を吹 元輔

後拾遺撰

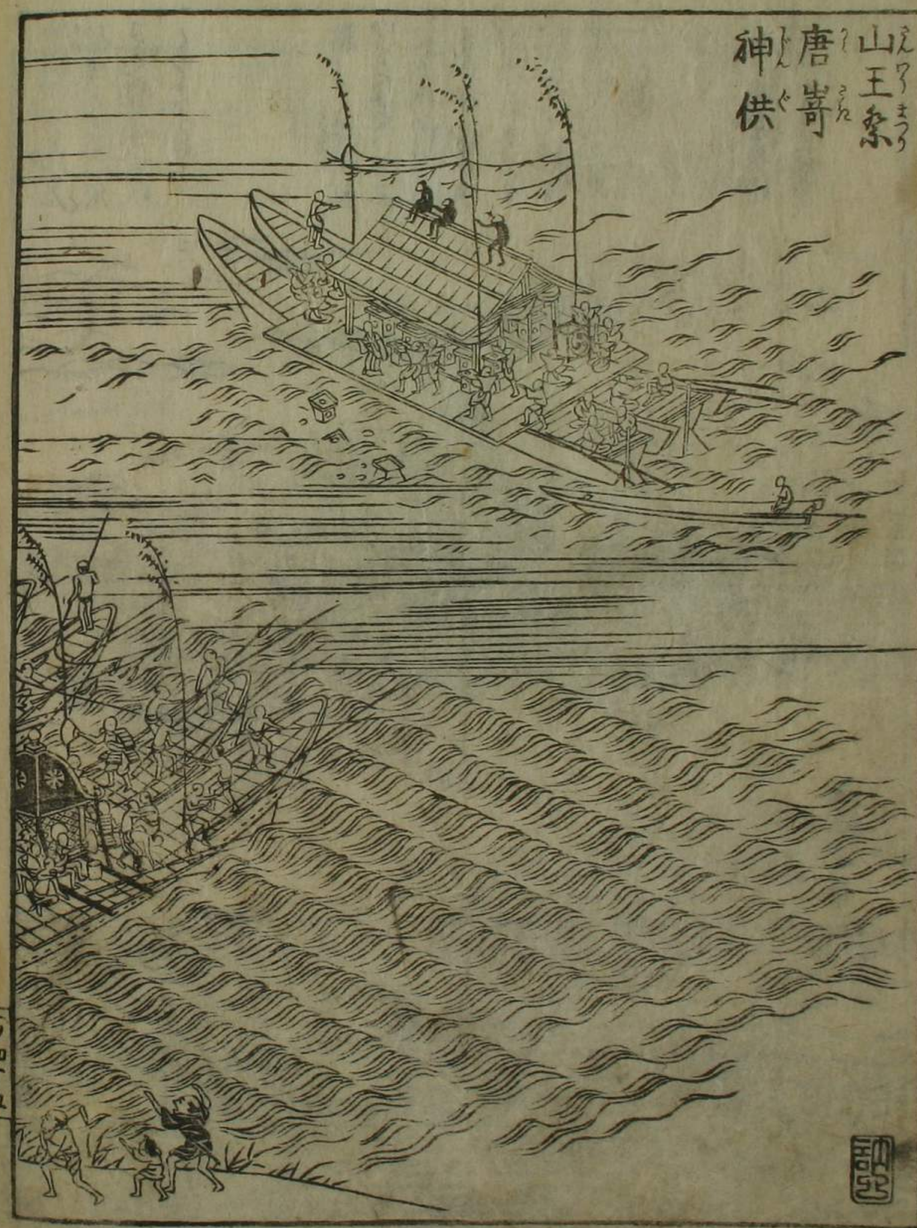
明治光秀城址

唐崎社
一ツ松
山王社

明智奈馬助光秀
山崎合戦敗北して
坂本城落しゆく時
大津ゆく時秀方
坂本城郎秀政ハ
国れ後方かく
名ある駿馬ハ
奈なれば湖水一
さんぶと奈ふこみ
相模永徳ら書
玄龍の陣羽織ハ
三つの兜と番
威風凛々くく
湖上とワくう
唐崎の松乃
汀ハ霞しる
古今の雄将
楚の項王乃
烏江とワくう

あもすげハも比ん
敵味方ハ見ル
見て賞賛ぞ
とワふ事なし

為ごく海の狐
ワるく実ハ馬上
ふあ〳〵其騎人
ハ深殺鎧ハ元
徒歩り立ハく
おゝだワ〳〵ハ人
昔の佐々ハ梶ハ
も出れ馬上
ふくワ〳〵れど
馬居ぐくくて
動ゝ是馬鹿
の習ひこそ


山王祭
唐崎
神供

唐崎神祠　辛崎の松の下にあり　日吉山王の摂社

日吉の社俗伊勢国守護

祭神海少童命　毎年六月晦日夏祓に遠近群参する事野一世俗千日参と云

御神詠

はらひ捨て賀茂とみやふつてごとみそぎやのふをけ来ぬけてまれ

御祓き

御祓をかうかうさたかおろに細る神のうけむくをうしかう

平祐挙

日

おくふかそこまうふ祓ふ清きあく舟ふも今人紅葉を形海

○山王例祭　四月中申日申別に至りて七社の神輿大宮より下り八柳

土俗云本柳

より船みく一散に漕つれ辛崎の松みを湖上に双ぶ膳所より

出る神供船に名楽を奏し七人の者猿の形を真似て社伝に端紐しく

神供粟の飯を盛る　を湖上に散じ大宮一社の神供に神輿奠社人白幣菓茶

一袋を添て船より船へ賜る日吉の社人渡に放茲神式お潮に神供船

より相撲の大敵を較べ七社の神輿又一散に漕つ是若宮の渡へ還御ふ

まる山神楽を観んとて多京師近及び遠近の貴賤ちふ聚て湖上

及び船を泛く家々の紋の幕に高欄めぐらし陸及び渡松風に諷々福人

聲今様の声楽々活の若櫓拍子の若あるふ宮司船諸度廟の船

湖上に及ぶ船中翻離しく浦海岸一の賑ひふりふ早振神の

めぐみに色ぬ松ふ名ぶひ鶴鄙の余波今もあるくむ〜かぐれ

風色ふ〜

初詣歌

〜倩やまさ浦岸ふ名ぶる神のみふひの名をそ寄り人

風雅

久〜この天は日吉は神ま〜月の〜〜も光輝人々

人道三位親王　学園

唐崎一ツ松　辛崎の渡を社頭ふ有り　九品孫君　極楽

御水　瀧を水　菜出に枝葉　義ふ及び長をる世い

松法ふ　ふ〜〜〜ふ　別記ふ書に枝葉　義ふ及び長をる世い

一株　ふ〜〜〜ふ　木より早三ヶ度ふ建ふ　真石の鉢

異　ふ〜〜〜ふ　松と称る半い遠近より見えて他樹ふ秀く

風雅　〜〜〜ふ　松の葉れ間く一葉ふ〜〜〜ふ

彩千

流れ〜神のみゆたのいふ〜〜〜ふ〜〜〜遠さ〜〜〜

蟠龍ふ仰ぐう四時蒼々やゝ〜ゐる君子の操成成〜霜雪成凌ぐふ葉成
庸〜成湖照る朝日四ケ〜松の葉さゝ〜に四ケ屋貴浦ふく風の夕〜それ
秋去〜忍色成海〜去ハ庭ふく朧々ふる沖の船ちいさく蓑の月け
涼〜成ふ悠々ふうさで波の音琴の音初あ〜〜わ〜れふる秋雲はり沓
曙みかゝ松の緑糸ゐる色〜をれでふ葉を摩耳で真鶴高牛と成その
實を嚼ゝで長生成得の脂ハ地中ふ沈く茯苓と成又龍骨とゐる青州乃
貢丁固ゞ爰拓皇ハ五太夫ふ封ド玄牂の保路を去〜〜心本朝みも任告
高砂曾根武隈の名松あ〜〜〜ゞ古松美一みて又実ニにあ〜〜ゞ
ものふ〜〜ゞ仙霊樹の落ふやゞりふ〜〜ゞのみゞりを得ゐも示ゐた
めでゐ成成〜〜みやあ〜〜ん

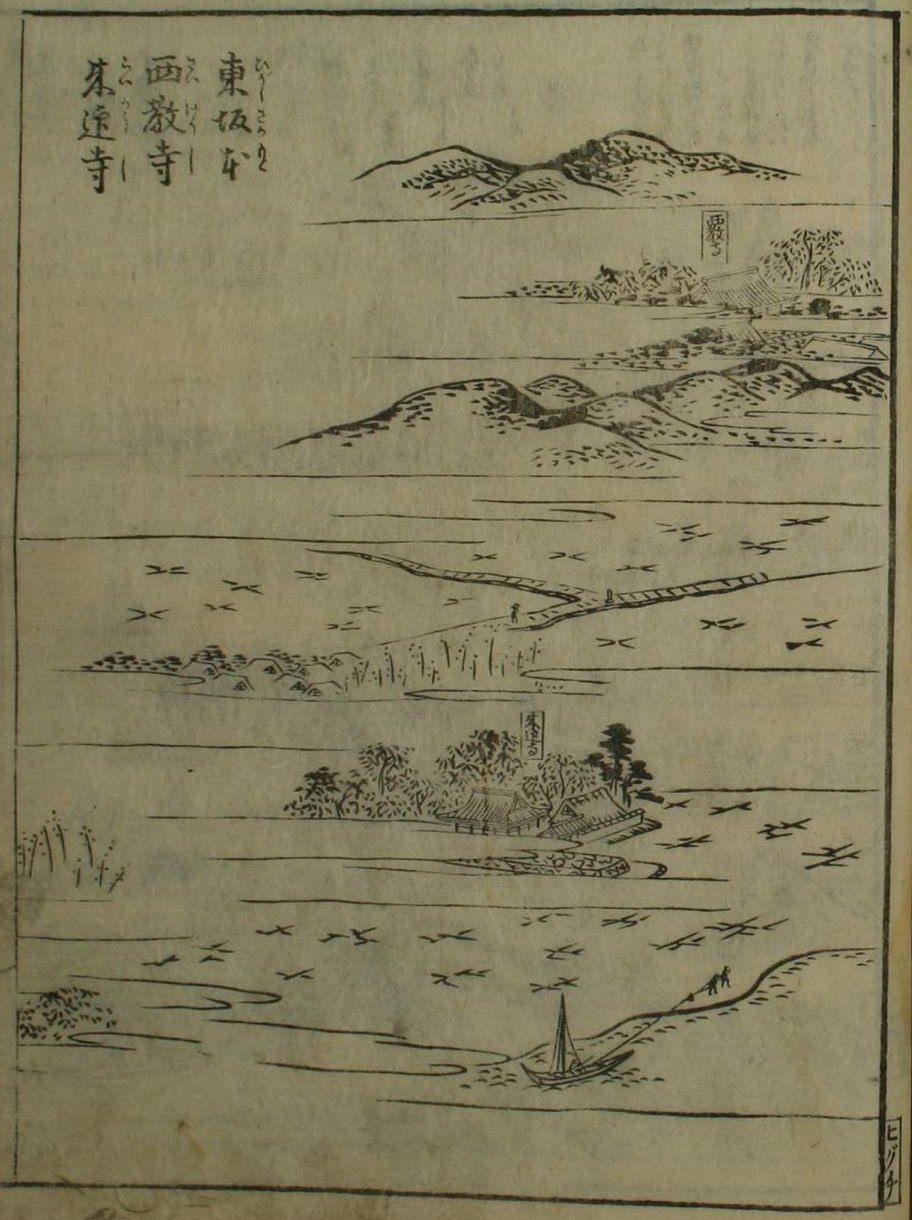
懐風藻
隴〜上 孤〜松 翠〜凌〜雲 心〜本〜明 餘〜根 堅〜厚〜地
貞〜質 指〜高〜天 弱〜枝 異〜高 州〜茂〜葉 同〜柱〜榮
孫 楚 高〜貞〜節 隱〜居〜脫 並〜輕

内裏清涼殿色紙形

志の浦や松成あ〜〜の吹〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ水〜み

大納言直大二
中臣朝臣

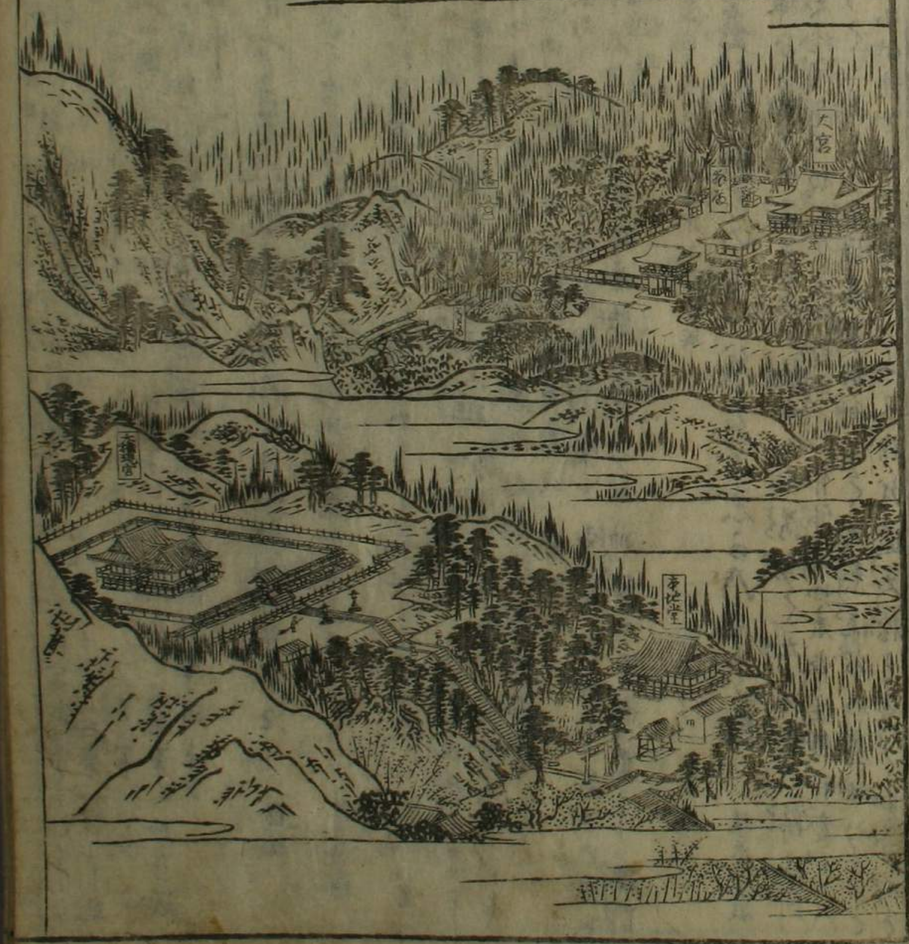
亀九新大納言
光紹画

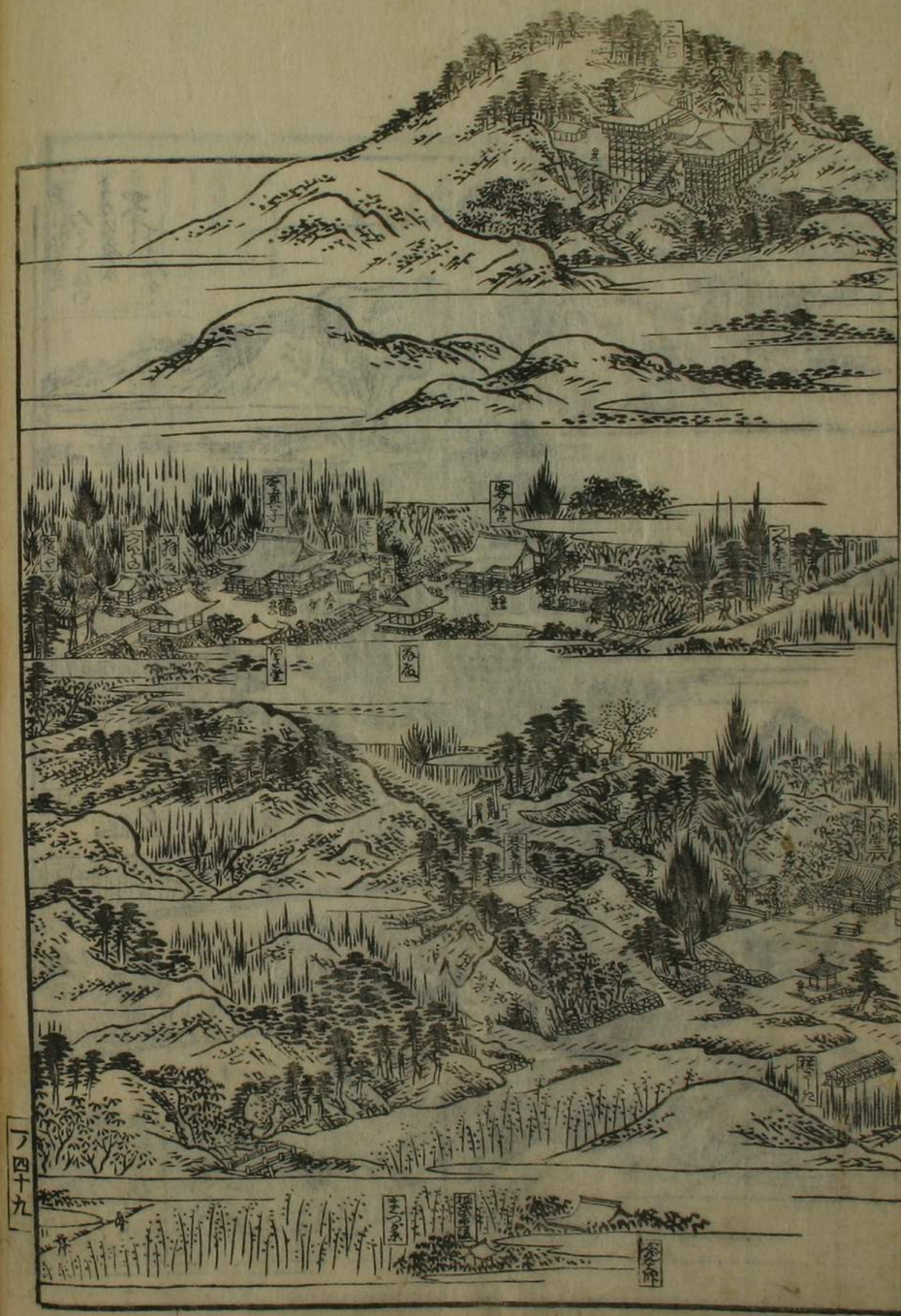


山王二宮十禪師

二宮とよろ
新方
やうこそ
れをこそ
くりかへ
のやの
ゆえを
琴ふ
ちよく
義門

日吉山王
大宮
聖真子
客人宮
八王子
二ノ宮





日吉山王神社　又日枝又禅叡又比叡と書く吉の字を加えとよむ事一説
古人の俳諧多く播州の住吉もとゝけえるべし　古事記日本紀
等業及び四書に俳諧多くしてえとよみてもよろしき事なれども若事さらにうす
よく事としてふ通じあるべし　旧吉住吉とよむ事　延喜已後の事
神名帳云日吉神社名神　又文徳実録三代実録国史等出
鎮坐滋賀郡坂本ふ立

新拾遺　世をとてあくく日吉社神の祭ふ山のぬさ掛けぬ日枝の社

後撰拾遺　行めぐり思ひ日吉の祭ふ山の榊々ふ七の乃社国さ〻〻〻

説アり親

○大宮　大比叡大明神　祀て山王権現と称ス　大津宮遷都の後白鳳年中坂本ふ遷ス　大系隠庭王慶命ス
七社倶ふ本地仏を立る大宮権現ハ釋迦佛或ハ観世音
竹叢　左右ふあり　新向仏と称ス住吉八幡を中に勧請し君子の徳を
表し　日枝大神の補佐とス　神秘あり　神巫ふ樓門
左右ふ朱玉垣あり

後拾遺　日吉ふよりて生る谷の中ふ大宮谷
いふ〻の露ふ林ふ散花の匂ひ成よりる志の乃うゝ風

後拾遺

波止土濃　神おの漢川の流を立て　流水五水流水今く五つの色七宿
大悲観音の初り　一切鬼生悉有仏性如来常住無有変易乃
波の濃音に止りて土濃あり　権現其冥加廟宮く大系流布の蓋
能宮あり　故ふ山地を波止土濃とい　又拾遺天拾とあづく恵日山と

同名い　拾上四帝の形ちく
廟の内ふ九燈を照しく　九ふの清土ふ山路
りく比叡山　大宮よりの山路
日吉社名勝跡のあらをとる絵名
新勅撰　志賀の浦ふ人の色乃波しそく天ぐりけ所い乃〻〻　大伝正長圓

桓武帝石淫図　波止土濃の東ふあり　宝塔之
白河院の御願　岩頭ふ清水あり　耀眼水
眼病ふ洗ふ平癒ス

春日社　大宮の西ふ春をく　寵殿祠　大宮の傍ふあり
中ふ宝殿あり　大宮坂路の口ふあり　朱丹柱上ふ　猴戸
山王の使令ス

呼字門　大宮坂路の口ふあり　朱丹柱上ふ　呼の字の門あり
神道脳金合鮒を表ス　伝之　懸合居と鮒と
神代より小比叡の裏ふ鎮座ス

○二ノ宮　神路山ふあり　祭神国常立尊
小比叡大明神と称ス　大宮と日吉ふ立ちの次
摩多羅神又金毘羅神　ふ〻く
十二神の中ふ一神として本地ハ
釈迦如来　摂社　大行事　稲荷
新行事　竈殿
疫井　二ノ宮の傍ふあり　仏教大師
疫疫の時ふ竈ふ井ふ
現ス　名とス　水極て清
味ひ甘輕茶ふ倫ふ可ス

○聖真子宮　大宮の東ふあり
天武帝元年坂本ふ鎮坐
祭神天忍穂耳尊　本地阿弥陀如来

日吉二宮のあ殿小湯る山その句い都鄙俳士
の名句と擬ミ二十六歌仙と真似て世ふ名ふ
社頭宮家より俳諧あるはも赤ふ色紙も
補修あり　ゆ

本地堂　本尊阿弥陀佛恵心大師の作洛東真如堂の本尊と同作同仏なり

橘樹　二樹神家ふかく仏神の数と表

拝社　聖女祠仏神ハ若狭の国の玄卿尊信心ー竜殿　氣比祠共ふ後ふあり

○客人宮　聖真子の次ふあり　白山明神と称ス

祭神伊弉諾尊　本地十一面観世音

北陸の高岩ようく仏山ふ来現ー中ゆへ客人宮と

影向石　延喜元年六月十八日雷落ち　ふ新向ー　延暦二年除仏時白山権現　故ふ若尺石ともいく

拝社　神春祠

抵園祠

小聖祠

○十禅師宮　二ノ宮ハ不ふあり　延喜二年鎮座

祭神天瓊々杵尊　本地地蔵菩薩

拝社　小禅師祠　内王子祠

夢妙憧石　二宮楼門のおふあり

拝社　岩瀧祠悪王子祠山末祠下八王子祠　俱ふ二宮の馬場ふあり

船石　二宮のお林の中ふあり下の八王子新向石と

明星水　下八王子の東林中ふあり

○八王子宮　八王子山ふあり　崇神天皇昇位元年　仮本ふ　無跡灌頂　鎮座

祭神國狭槌尊　牛御子祠　大法王子也本地ふ観音

拝社　百合ま祠

○三ノ宮　八王子山ふあり　延暦二年　仮本ふ鎮座

祭神惶根尊　本地薬師　三貴女　昆嶽　故ふ二宮といく

拝社　美御岩　新向ー

金岩　八王子　新向ー

○中七社　牛御子　大行事　甲尾　氣比　下八王子　王子宮　聖女

○下七社　小禅師　悪王子　新行事　岩彫　山末　飯宮　竜殿

巳上山王二十一社あり本地は大薬院
産生院命神荒ふりまく立る他丈
迷情の臆説ふあり仮日吉山王一實
神道三諦即一の義山家ふよりて
ちなんで成唱

○大権現御宮　真菅原の上ふあり

瀬佛堂　御宮の中腹ふあり
本尊某師必未

金鼓　寛永三年丙寅十二月と鐫を
銘文略に

○桓武天皇御廟　真菅原の東ふあり

○慈眼大師廟　帝陵の傍の北あり
南光坊天台座主
戒壇堂の傍ふあり

後古　至真子宮みくらよみてまりける
やくくて光にへてとてあくしかしこの雲井は秋のよ乃月
客人の文ふまりける
日
寄ふ又光成ふくやとたうふ就の白秋や雲乃ふる里
後拾　客人の社ふくたのちふ成みくよりふ
いまくしの就ふおほくく山橋今もふくふ君と法はく
新千　客人の拾現と
ふくあふいみむもふたふ初くしき乃ちくふ

後拾遺　十禅師ふくよりくまりける
就の山有時の月にめぐりあくまくれ立花のふりやまもむ　義圓
主宮社山王七の御座しふの御神巍然やくて鎮座ふ中ふも
大宮二宮ハ日枝の山領ふ神代より天降て六合の本柱ふ
天子本命の道場朝敵降伏の神威平天下の御護あり累ふ波や
母穂ての湖ふ止観とたくしふの山就々ふ一念三千の機を成くしふ
向ひ座ふ坐むけ社頭森々ふくしく山のをがくふかくく溪の流ふ
神祠くのたくを固ひ他ふ異みくく社一社玲瓏ふり實ふ神秀の氣れ
あのまふ新洛海一州の靈窟ふ一墓ふ面岩の山傍橋笠を事あげてやふ
くとめぐり大廻の阿闍梨ハ洛中の神社ふも巡ふくしてゆきくのくく
ふ結塚くに日毎ふ苔くの道滑成昔ハくくしやくくくく
おびくたる拝神代ふくのまふ法みふ清澄ふくて正直と男とふ成ふ
を成くくの罪外ふくく地祇の求ふいてふくく万民黒ふふふ深く根の
國ふを満ふくふ因茲神と現ず仏と成ふ仏ふ現ふ仏と成ふ現ふ仏と成ふ

両部習合〜なくも示尊〜むーとう本地を仏と〜垂跡を神とぞる
浮屠氏のあらひ願ゆい本地を神み〜ゐ垂跡を仏とぞ我神国の本社
の初ざ信験ぞる

日吉神詠告傳教大師　羅山子神社考出
波毋耶麻夜於比睿乃寸幾乃比登里伊波
阿良之毛左牟志登布比茂奈志

彩古　あるるめやるくの子日は振小松おひん来ませさらゆ〜ゝと

（日吉社司社務のうちの山たまりくる子日〜七
佐り多衣人の髪ふみ〜けるしめん）

傍正貫因

拾遺　祢さかる日若の社は本綿さたさ髪のうえをもとやりてさを

従部成義

新後撰　あひふかひひく日若の宮そさやのある七の星乃恵寿光千

法橋素樹

玉葉　日若五社首のあまりける神五
うゆ〜とく法のミゆ守るとくぬりとふやとる神とそきけ

新古　逆鏡のまろと
永あめむ七の社乃ゆ〜さそたのけても六の道にゆくとれ

傍正貫因

全

日
り祢人の祢ひとゆ〜の渓風丑仏源〜さ者その者このか

三津〜戸津志津今津之皆坂なふあり

○真菅原　権現山の下樋馬場とて葛鎮和尚の別院ありて〜〜旧源人洛東の
真菅原〜葛鎮若水ふ五丑ようまの獅仏後世護あるべし

拾王　永京い松と〜ゝんのそあ加〜て陸ゝたら京ふ風ゝくゆ

一ノ五十三

○四ッ屋若宮　下坂本四ッ屋町ふあり
大将軍仏祀る

○登町若宮　下坂本西側ふあり
客人宮の一躰ぞ

○奥成宮　下坂本多江乃町ふあり
神躰道祖神

○比叡辻　下坂本のふの端
ふあり

○石占井　上坂本岩神町ふあり
四神足と洗ゆ〜井ゝ

○大多居　養本柱馬場先ふあり
太神門と〜

○妙見祠　生源寺の後ふあり
伝教大師の母ゝ仏

犯
妙億まんと〜

○三津百枝祠　八条の上ふあり
大師の父君仏祀る

○和産和汗塚　馬場先
南神ふあり

傳云ふ塚ハ大師出誕の時
臍の緒仏収ル所ゝ

○大政所宮　馬場ようゝ町ふあり
小神真入所ゝ京師宮町山王社ようゝ
神供
と〜て〜辨子義田楽法師ゝ〜〜〜〜
初穂供ぞ〜ゝ仏未の御供と〜
と〜ゝ辨子義田楽法師ゝ〜〜〜〜
ゝ〜ゝ〜ゝ〜

のあ殿（還幸）し七社を合せ奉る
さて此社前宮なりとい
○王子宮　大政所の社ふあり　王子宮の西にあり
○亂祠　小ふあり　東神
○彼岸所　大政所の御房之
意覺大師の御房之
○早尾祠　早尾坂ふあり尾を尾とよむ
東神　篠田長令
○走井宮　走井ふあり　東神
瀬織津姫命　本地弁天
○塔下惣社　彼岸土橋ふあり日本大小神祇を奉る
平將門　銅伏の附き
○八柳　下坂本の渡ふあり　柳町と
大津八柳あり　権現初く出船の体と今ちに准ずるあり
舟とせし間是の御幸ふのうさたのむ〜と神やそひ出〜ん　北方法師
○滋賀院　馬場の南ふあり
坂本御殿と称す
○神路山　大宮より二宮之の
社なり
○榊宮　滋賀院の
門前ふあり
○稲子宮　神路山ふあり土人
獵矢崎と
主尚宮の神垂迹々々〜く廣人の計ある事紀氏本宮七社中
七社下七社合く山王廿一社〜小社八十七社本末都て一百八社之
○霊石　王子宮ふあり王子神ふふく
さて此霊〜ゆく神子の尾形石あり
又三合石とも
あり〜
○地蔵堂　早尾社の下ふあり
伝教大師自作の石地蔵安
早尾坂小側ふあり
○走井大師堂　元三大師を安
○猿塚　咩堂　香居のあふあり供合の猿屠所
さて此埋む窟あり庚塚（通ずといふ）

公事根源ふ云日吉奈ふ中申日神輔ハ洛西松尾の社と同体ゆ〜て大ふ
吹神あり　後朱雀帝長久四年六月八日ふて先く廿二社の内ふくわる後六条院
御宇延久元年四月廿二日ふ奈ふ成て先〜ふ白鳳二年
天武天皇昇位二年之社傳ふ　上巳日ふ大津宮八柳浦ふ山王神幸あり〜所ふ
天智帝の御宇と記せり
御上ふ二艘の漁舟あり老人田中恒世と人ふ天晴光と申ふ其時山王権現
示して曰汝等ワ且ふ本岩松の下ふ誘く〜二人の者ふ且ふ本ふ則漁舟ふ
溝つれく神幸しまるゑ山王伯ふ日祇ふ齊忌の神供をべ〜恒世對く云
漁舟ふ好物かし美楊の小筍の中ふ栗飯あり汚穢あり〜汝神供ふ献を
べ〜とく覆盆子の葉ふ盛くあ〜ふ伯〜山王喜悦斜ゆ〜汝恒世昇
漁舟ふ棹さ〜く韓崎狐松の下ふ到る権現又示〜く曰奈船の神遊び
栗飯の神供懇ふ思〜汝等子孫永く毎年四月中申日ふ松茸ふ神幸
恒世さ〜め栗飯と神供をべ〜と云終く神路山波止土濃の〜と還幸〜
〜延とり神奈ふ恒例とく〜く古實をふ〜先っ申のお末乃日ふ

八王子三宮二社の神輿と八王子山の殿より落を以神輿舁数十人宙
ゆくうけ五坂阪を過てゆる労ひ猛みつく死生を辨じあれと神輿落し
とゝへをれとも大政所三宮十禪師八王子三宮の四ツの神輿を遷し西乃
刻ふ京師よりの神供を献る晩ふ入く獅子舞田楽あり初更の比ゆ相圖
ありく四社の神輿の轅と一度ふ落しなれを一教ふお渡を牽ふく走ふ
あれ以又宵宮落しとゝへ嵐祠のあみくお渡の猪員を極り大宮の殿
ふ入る申の當日ゆ山門の大衆ハ横樹鞭に羅を妨なの衆徒公人ら
甲冑以粧ひく社頭へ引列に其ほ大ふ猛威を震ひ神武若人の非礼以
礼を案ふあれむ〳〵官幣の勅使牛輿の遺風と志ゝる横安の芸のみく獅子
舞田楽あり榊〳〵神主代の児恒世者子鬼令鍼子ハ東帯みく大津
馬場村より出る七社の神輿ハ申の刻ふ神幸あり惣合ゆふ麓る牽矢の
必〳〵漸石を居みくお渡の勝員を極む神輿ハゆ以も飛ぶ必くふ走りく
八ツ柳の渡ふ到る諸人あれと見んとく横町を抜く田圃の畔を走り又腰

刀を切げ飯負以擔く走るもあり本の業に風ふ誘ゆるゝ必〳〵七社の神輿
ハ八ツ柳より牽船あるく幸嵜仰旅所ふ到るあくみく順例の神供以献る
祭式畢ゆ又漕庚〳〵比殿辻の彩宮乃渡ハ着岸〳〵ゆ七本社(還幸ふ)
きるあれと孔ゆんとく遠近の貴賤馬場ふ群集を茶店ハ多く遊と双く休
所と設け者人ふ店以出〳〵く稚々と賈ハ酒賣餅賣粽賣引豆落し水
嚢入辻的ふ礼引烈の次第ハ郡系の中と賣あり〳〵く旅舎の泊人ハ庭裏乃
狭き以恨と笠を脱ざる者ハ警固の技以蒙る傳云山王祭ハ故實あ〳〵しふ
多くゝと抑二月中申日より始り近郷近在近江七浦みふ祭祀ふ頼る旅ふ
七年観ざれとも〳〵〳〵見ほ〳〵〳〵年業果り久遠ふ及ぶ〳〵ひ〳〵
加祐の古實今の世ゆ残まる祭祀祈ゆれ色土遠境の人も生涯一度ハ
観ざんであるべ〳〵ふ敬ふあれ治平安民の行事ゆり

千載

あ〳〵おむ同古の新ハ奥山の紫竹戸すてもけ〳〵さ〳〵めやら

拾玉

り祭ともふ賀茂と日吉とあひ兼同〳〵卯月の榊をとる

慈圓

全

山王祭ハ卯月中ノ申日
ヨク坂本法師ヒトヘ
古実伝紀ノ馬場通の
切然荘観ヒトヘ
圖ヒタ年
一ヒトヘ
の

比叡山
四明嶽

比叡山 城江二州ニ跨ル 日枝又禪叡又天台山又台嶺又比嶽又北嶽又都富士ともいふ 秋立山と紙に

神社考云

伊弉諾伊弉冊泣干海其子鋒滴潮凝爲一島名日磯馭盧嶋是日枝ノ山也

諸社根元記云

平安の帝都ゝ天上の名流とあらんこと国ゝ良辰あらんことを光仏の神光紙ぐくもその光仏厚日厚といふ山あり日比叡ぎの所成諸神ありつかれ日厚のふく名ばく

懷風藻云

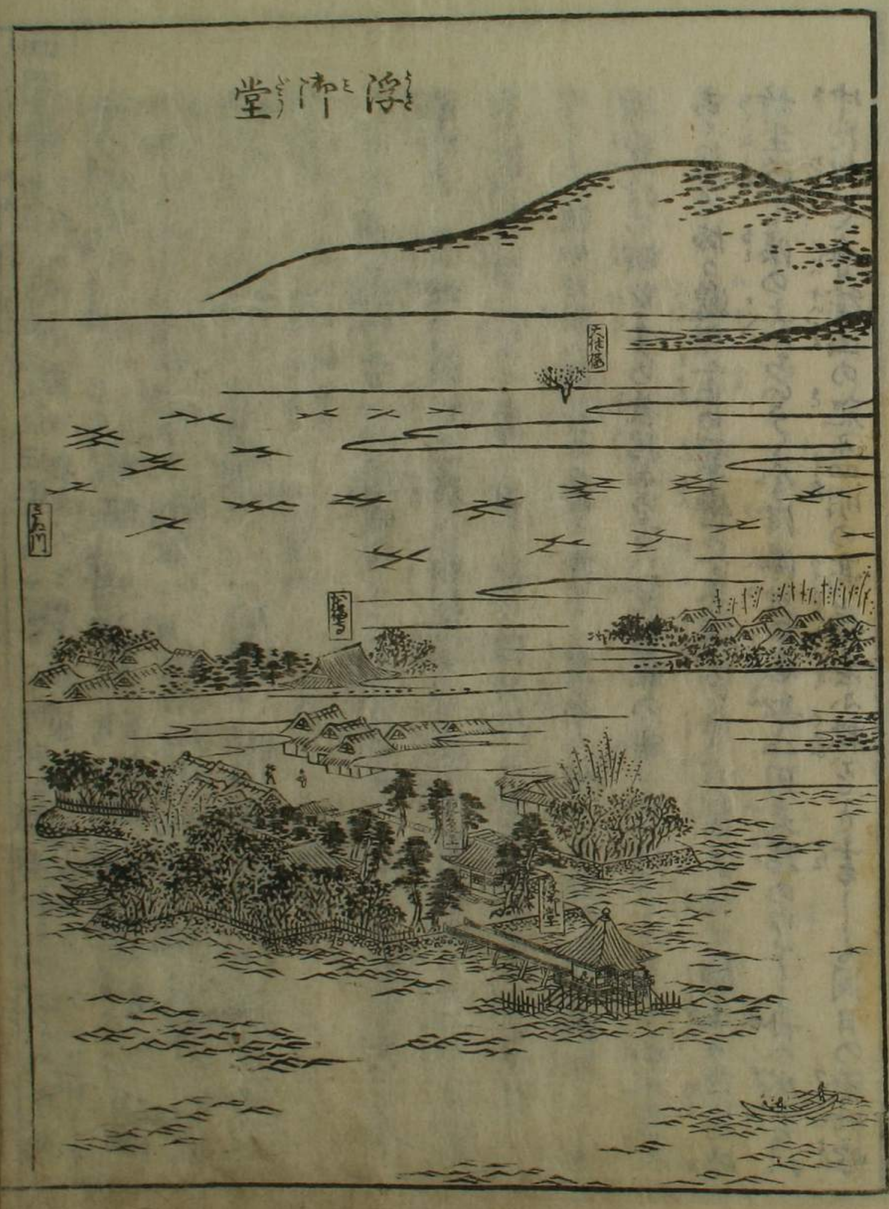
和作上 藤江守詠禪叡山先考之舊禪處柳樹之

○近江惟帝里禪叡寔神山山靜俗塵寂谷間眞理等於穆我先考獨悟闡芳緣寶殿臨空構梵鐘入風傳烟雲万古色松柏九冬專獨依依寂寞精禪處俄爲積州月桂英去慈範獨依依寂寞精禪處俄爲積州月桂英去慈範獨依依寂寞精禪處俄爲積州月桂英去慈範

富士山
四明嶽上諸仙龍
丹鳳城邊瑞靄濃
ふ覺凉然千里雪
青天灌出玉芙蓉
秋巒篇
小比叡
鹽田浦

三上山
山岳連
東塔
西塔

堅田浦
錠あけて月さし入る
浮御堂
比良
まの入江


浮御堂

四明嶽比叡山の絶頂に山王社より北に十町許ふ瀧社あり此社は傳教
大師の所毋堂ゆ德夫人を祭る卯月八日花の日は女人を許して
祭ふ石碑あり此社より東南の方へ中堂まで二十町四明嶽は中堂より八町
十解半ばれ日枝の頂上より東南の方へ三四町ばかり行て四ふ所
妻恋嶽有り是山城近江の間懸崖の頂上に一樹もなし根盤の岩を裂て
廟塔あり四方石の玉垣あり五町半ばかり行て岩倉寺と中堂の
中間往還通へ出たり
夫四明嶽は山州第一の高嶺なり山水清暉と倉千里ふ目を極むまり
西南は　帝城の巍然たる粧ひ鴨川大井の二流愛宕高雄の連峯雲端
は淀川の流と長く遠く眺つゝ波雅津の金城其西は滄海洋々
たる帆かけ船は毘盧の蟻ふ似たり東南の眼下は唐崎の孤松大津
浦粟津の城郭多の長橋小の方は琵琶湖の樂々波悠々たる山水の美
あにたぐ為る邈ふ上の畢竟比良膽吹の雙峰焦遠ふ浙く湖上は沖の鴨
竹生島も沼の上ふちらく今は海津の為船山田矢橋の渡り舟は水雲れ
中に釋之會稽山の記は四明の高嶺雲ふ軼をと書しも同日の論此嶽

も四方明あれど四明の名あり秋の日雲消し大外蒼々たる時は駿河乃
富士山は峯より元ゆゝ百富士と云ふ来師の愛宕山より富士峯見
ゆるの圖あり日枝の山は近江および三ヶ国を見おさめ
大抵二十里の間水乃低き深く其より東の方ふ見尾三遠四州の間は高山
ふ遠の秋葉は長嶺ふ高峯ふ蒼天ふ接すよう見ゆるとい半
疑ふべ〻ふ傳聞元弘建武の乱は山ふ皇居あり講堂の供錫ふ
捧奉て度々元亀の暴逆時世は変ぜ〻ども煙霞は変ぜ〻人物は
改まらず風流改らず抑駿の富士は三国の名山なれども頂嶺ふ登る時は
勝臘ふ雲を歩み雲ふ入るゆゑ必し湖東北の方海陸の口ふ元あり
只旭の出る所ふ向ふ外ふ我立松ふ　帝都の繁花琵琶湖乃
八景みな目中の客と為り城江二州の絶勝なるべし良嶽は山
艮は根ふ〻堅し又卦の名は丑寅の方則一陽来復の後ふ繁寅ふ
演く東方孟陬の辰あり故ふ王城の鬼門を護て悪魔ふ祓ふ

謂へ世俗鬼門柱とゝいへり比良嶽とゝあゞ

成光山西教寺　坂本大宮ふあり天台律宗の本寺

本尊阿弥陀佛　丈六毘沙門堂　開基元三慈恵大師　恵心僧都作　念仏三昧道場

紫雲山来迎寺　中奥真盛上人遺号圓戒國師と　下坂本比叡山麓ふあり天台律宗の本寺　念仏三昧道場

本尊弥陀釋迦藥師三尊　開基恵心僧都作開山堂ふ　恵心僧都の作と安に

苗秦明神　苗秦村ふあり延喜式三那波加神社　例祭四月中酉日　山地の生土神

祭神天太玉命　山神老翁と化し鹿ふ橋を負せ出現　七年ふ造立苗秦の神主ふ祝賀の事管家傳記ふあり　天智天皇

堅田浦　志賀郡ふあり大津より三里　領主堀田奚守　湖水の船着

後後拾

ふりしきるあをかうれあるゆふくるゝの浦乃あまをれうけ縄　祝部成賢

新千

哀のくるゝての浦はれあたふるあもしもゝ浪立寄ふ　四条院入道前大納言

新拾

たゝとゝゝて此浦の沖は波立名いうや袖ぬるゝん　通暁法師

新後古

さ波やうゝもゝに成ふくりあいくゝてのあまを捨ふ　前大僧正乃去

後後拾

後ふゝうた名やたゝん生半ハさそも堅田の浦乃あまゝ活　宗成

勅撰

いあゝハ山せゝ月ゝこゝうゝて秋はゝ風ふ吹る中の玉章　慶円内大臣

むゝゝゝ浦海の名産ふ源氏帝新しゝ　ゝゝ付家ふ錦織源氏錦といふ　若漁者ふ同伴其漁を伝絹乃

至ゝく若ふ家ふ来ふ　国是其支配司を舞の名ふ

あゝハゝとハあゝにくゝゆゝゝ　官家ふ

堅田落鴈　近江八景之詩者　相国寺林長老

鴻鴈幾行更不孤晩風帯月落東湖

哀沙背水堅田浦猶見孔明八陣圖

哀ゝゝまゝ就てゝゝちにゝたゝゝくゝゝあひき落るゝゝゝ　哥者　近衛関白時慶公

浮御堂　志賀郡堅田ふあり宗旨禅宗海門山満月寺と号ふ

本尊阿弥陀佛　左右ふ化仏一千躰と安ふ　聖徳太子作他の観音ふ安ふ

系作紫雲大徳寺に属に　観音堂　又僧教大師の作北薬師仏

弘法大師の作石地蔵菩薩安ふ　俱ふ恵心僧都の作　一條院御宇横川の僧信

僧都の開基菜葉の草堂　源信僧都横川の山岳より湖上ふ御堂ふ

光明赤ゝゝ　山浦ふ来り漁人多し　漁者の網て

係て浮ゝ山浦古来より漁人多し　金一寸八歩の弥陀の

腹所ふ竜ゝ本尊ふ一寸躰と安に　殺生供養の名ふ黄金仏

再興に及ゝ又其跡ふ　櫻町院　紀の下しゝく　作者

三日の名法会あり　寄附ふより五十年系作堂数次

近郷群系に　容殺ふ

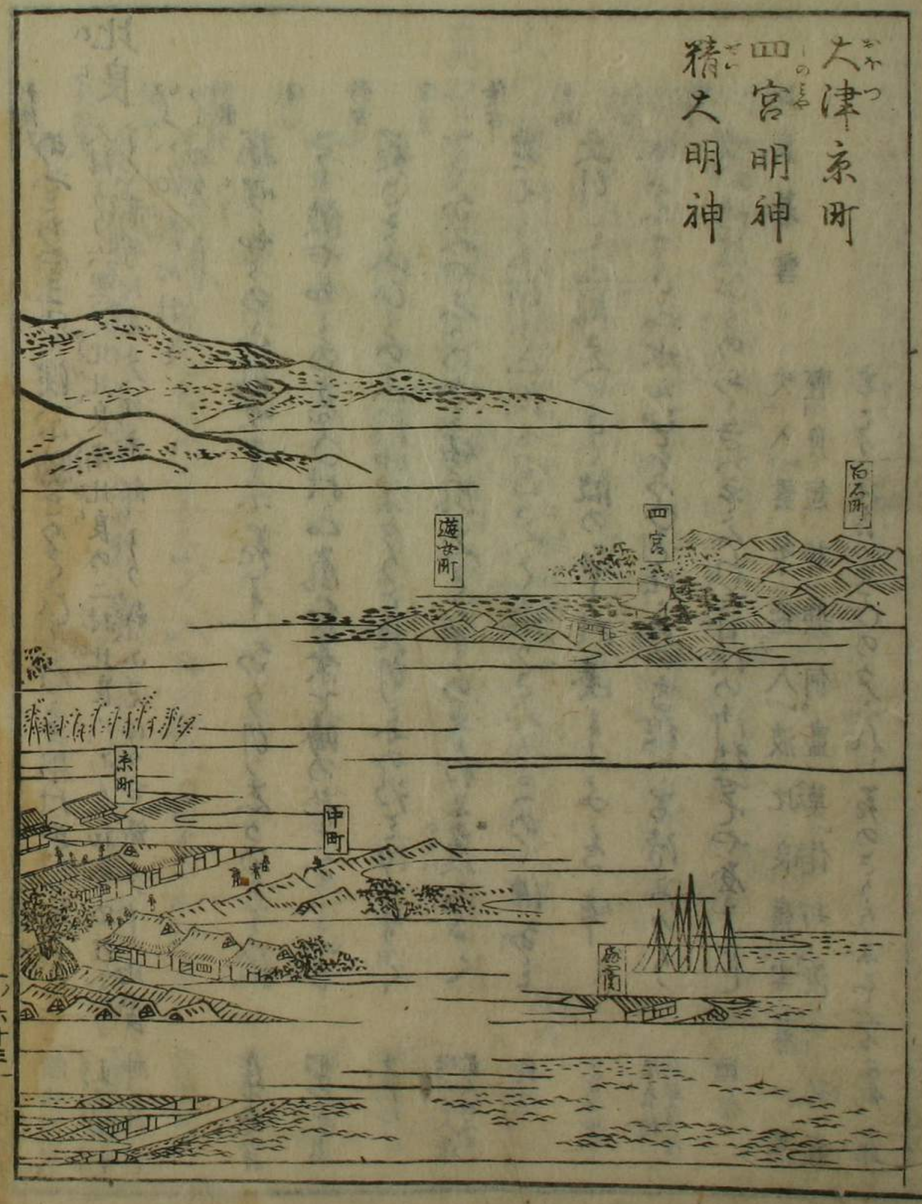
勾當内侍古蹟　今堅田の田地中ふ塚あり毎年九月八日衣ふ入く　系車代

つゝむ今に忘る半ハ　山内侍ハ頭ノ太夫行房の姫ふく

左中将義貞ふるさと東の海の中ゆ
つら紙のかゝるふやうる新あとゆ
くつらかゝれたるきさらゝ
騒山花盛　左中将坂なりゝ小國落ひゝ附
山内侍ゝ今堅田ゝ
討ゝ
湘ゝ
岩戒の往生院ふ入おろとゝ
うゝ　年太平記ふ
大伴櫻　堅田ゝあの方五六町山際田圃の中ゆ塚あるく真上ゆ櫻あるゝ
真聖入江　堅田の小ゆ真聖村真聖川あるゝ
浦浪あゝ古編多ゝ
合集
鶴かくゝ波の入江ゝ波風ゆ
後拾遺
吹おろゝ波ゝの嵐や寒ゝ
後古
夜半ゝ吹浪風ゝ
新後撰
真野の浦ゝ入江ゝ
後千
冬ゝ
新拾遺
礼芦のほむゝ風のゝ

源後撰
源後撰
源後撰

大津京町
四宮明神
猪之明神



打出濱

京師より逢坂山を越て初て湖水へ打出る濱なれば名づく
今の松本の渡口なり　上下略

新千載　さゝ波や　比良の山風　吹ぬれば　波ぞ　岸こす　白浪の　打出濱

後拾遺　みるめ　海人の　袖　なれ　白波の　打出濱　袖　ぬれぬ

新拾遺　白波の　打出の濱を　見渡せば　舟　こぎ　出ぬ　人　なしと　思へば

玉本　関雄　打出の濱　打出の濱　白浪の　うちての濱　秋　夢ふ　多　浪　なれ　ぬ　袖　ぬれ　ぬ　袖　ぬれ　ぬ

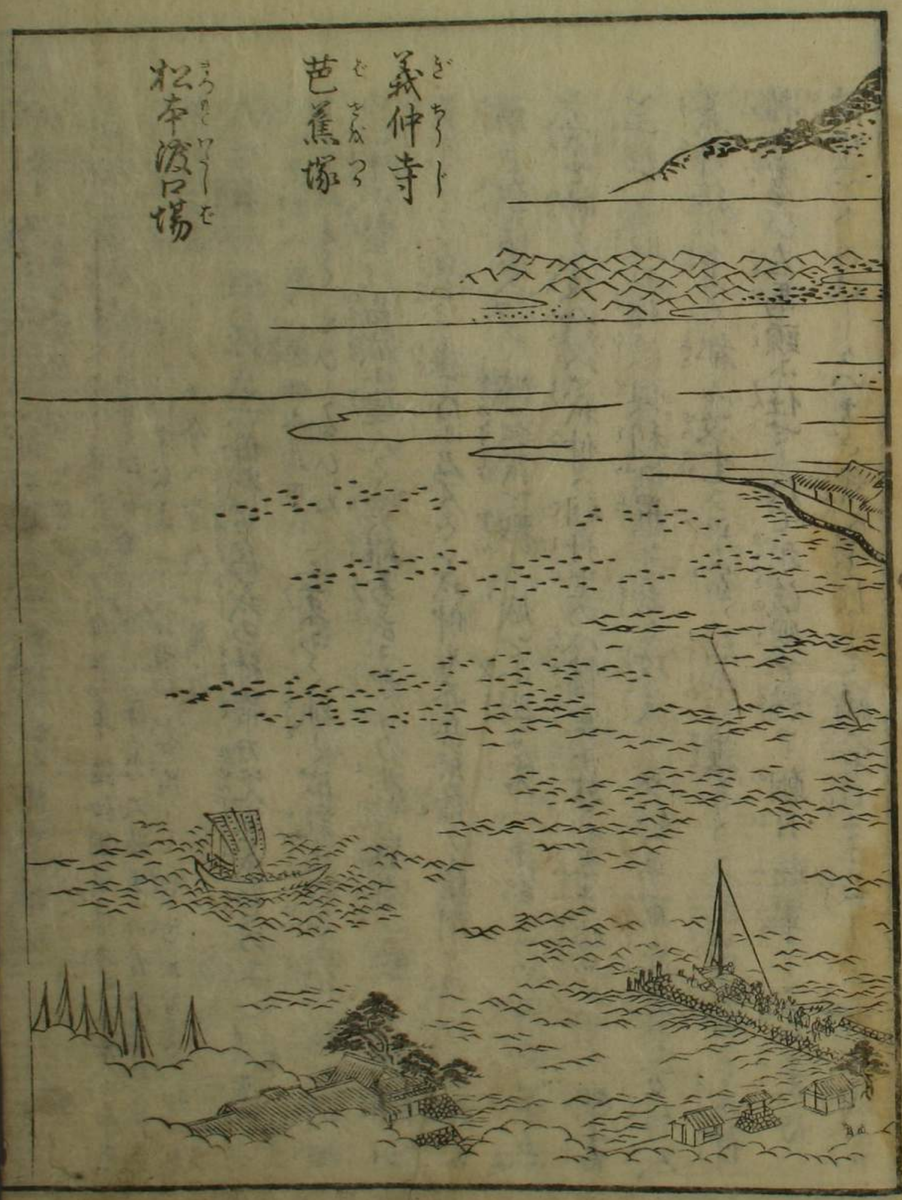
四宮大明神社

大津四宮町　ふあり

祭神

天孫　地神　四宮　大国主命　右ハ地主神　大国主命　右ハ地主神　大国主命　右ハ地主神

墨山
芭蕉堂
菊渓
尾師
玉造


義仲寺
芭蕉塚
松本渡口場

義仲寺　馬場村にあり山門本曾義仲戦死の地に佛堂小牌あり
又家臣兼平の牌も安に

義仲墳　堂前にあり或記云天文廿二年近江國司佐々木高頼石山寺
縁起の内に古墳とあり保家の大將軍の古跡寺戸かく
ていあり〻〻に〻〻一宇を建て合田氏家附し堂ち氏付る初メ也
石山の末院なりしを今は寺門に属に

木曾義仲姓は源氏六條判官爲義の孫帯刀先生義賢の子之義賢は久寿二年
八月武州に於て悪源太義平の三男おく孤と成乳主の家に依て信州岐岨
の山中に蟄居長成に達して英雄勇武の名高き木曾冠者と號し頼朝と
豆州より義兵を擧げ信州と平げ上野を
経て越後に入り城長茂を戮し威を北國に奮へ京都より平経盛兵
十万を仲て攻戰へ義仲は羽丹生の八幡宮に於て大主坊覺明に願書
を書せ〻収め祇園倶利迦羅を急に攻落し〻れば平軍死る者七万餘人
義仲猶北家に都に攻寄る平家は幼主を護せ〻西海に趨る義仲
推て君ひ左馬頭に任せられて越後國を賜て朝日將軍と名乗
院宣を下されしかいまを賞あ〻ばして驕奢日々に長し公卿成剛官

〻土民を流毒し上皇を逐内裏を焚暴逆多〻し〻ゆえ鎌倉より
範頼義経討ひ〻〻く義仲を攻せられ宇治勢田を堅し兼正に打出演そりあひ殘る義ひ〻を逐ふ
主従二騎に討られ粟津原の深田に馬を乗入れ縁とこ病に石田小太郎
為久が矢に中て戦死し〻ゆ平家も亡ぶ

○芭蕉翁墳　義仲寺境内義仲の傍に葬る天下蕉門俳諧の祖

枯尾花出辞世

旅に病て夢は枯野を駆け巡る

枯野に成りけり

西國の俳人枯尾花の庵に来し是蕉翁終焉の地なり其人意は一茶蕉翁
して病と病て終に大坂に来て元禄七年甲戌十月十二日
享年五十一門人其角支州正秀去来を初メ十数人看護し〻ゆ
○近年寒暑十年の比京洛下
茶室に創し堂内に蕉翁四方の俳士に願く仏
前に子の血脈の掌孫の龍とたつるくまれに書しめ四方に
○什寶に蕉翁の樣に杖笠の像
業陣文庫といへ近年出真蹟集刊行し世に有り

ゆたるに成りかく寿や枯尾花

其角

志賀の浜 湖の水

素堂

○芭蕉堂の澤ハ無名庵と云あり蕉翁東西ゆきの時此庵ハ止宿し
多く年多く寛保の比尾州雲裡房石山の奥圓光寺の侵庵の
古跡ハあり〻 椎の木とも樣古ふるし住居幻住庵と額をうち
かゝる 歌

○義仲寺の二町許南小圓山と云あり蕉翁の上足丈艸ハ此に庵を結んで
仲幻庵と号し閑寂の地名龍圓と改ひ丈艸ハ原尾州大山の家に
あり〻しふ出家し禪宗と成り風雅を專らとし詩を善し俳諧ハ正風
の手ぶりと賞く秀句多し 遺ハ あくに徳ととる

大原や蜆の出く蕗の薄 自

丈艸

京半し 鍬のふげし 根芹

今

膳所

城あり 本田度領せり 城ハ門より五ケ丁あり 城下の町 祇て北に町く
西の口 船町を多く宮ノ町の右ハ八大龍王の廟ろあり八の宮といふ
糸ハ五月五日ハ龍神の社あり中大ふ膳所明神の社あり中ノ庄ハ牛頭天王 稲荷の祠
遊ハ八大龍神の社あり 陽炎 陸水 吾孫君と多る田畑の祠あり中ノ庄ハ牛頭天王 稲荷の祠
宮町ハ多宮八幡宮 新羅明神の社あり 別所ハ門ふまちにうし
棲ひし國分の任多る曲翠と云門ふまちにうし
ふやとかし 古跡又茅庵堂あり 國分寺と云
膳所ハ原粟津 膳所濱あるべし 山王糸ハ神供ハ献ぶ由緒あり
例祭の多七日の間ハ膳所の頭人の家ハ猿の紋幕を張ひとの者人あるひハ

湖水交易の船多みかさ有ハ征し其多ハ應ぶ賓客をとり神供料
とハ古ハ十分一と云ハ起を原ふむ 山湖ハ二人乃総甲あり
名ハ近江粟津佐森陽焔と云ハ今ハ人ハ日吉近江佐粟津恒世と
あり〻ハ鎌倉頼朝卿の台命ら〻て近江國二十四庄所ハ多の人の支配
九十九浦の初徳十分一ハ近江佐粟津恒世ら支配と云ハ 按ハ日吉の社記ハ恒世が大津八の柳と云神供ハ
又膳所ハ陽炎の ほ ありハ膳所に居住せ〻ハ 粟平の 瓶曲に 粟ばの 粟や
ひけろ人の石山寺と 猫 ハ も 古ハ〻の 申の糸日ハ縛船二艘ハ 樓ハ
らひ粟飯の神供を餅を船中ハ
若樂ハ奏〻く城多ハ めぐる船の中ハ 猿の面ハ被を毛髪を 若者ハ
七人あり 芒れよう 磯づたひハ大ハ 漕り領主より警固ハ も 便ハ 漕
連 陸地往来の者又ハ旅人かど 笠を被かゝ〻 あれと 鏡ハ 鹿毛ハて
知ハ 術年の刻ハ 座 時ハ到 沖ハ 泛く 神輿 ま り く ま れ と 膳所の神供と
ハれよう 申の 刻の 神式
幸 嘗の下ハ又ハ〻

粟津松原
去梅ハおしふ
つれくなれも
波のあハは
近衛関白時熙公
粟津暗嵐
歳度粟津春興
長吹頻吹雨似
相在山花片々
一皆波潮上閑
鴻夢也香
相國寺松長老

木曾四天王
隨一之軍將
今井四郎兼平
粟津原血戰

春泉齊

階膳濱 鰯ばの濱をいへあり〜〜むらいへ 禁裏へ鮮魚を日次ゐ寅
すーうを故有ふ濱の半多〜
拾七
とて古るゝ時もあ〜〜かあるをあるおりの濱の蜑れ目つきに 兼盛

栗津野 又栗は小野又栗は野の京の古称多〜〜又はたかうう勢田橋
その恵号之今ハ御通をゝと栗はのたかとしてあるべし
後拾
あそはのくるくるの落つのくれハそ立あ川む駒そいさ若る 権僧正孫円
新千
いそ〜〜ハ夜ゆめれく浦寄のあ川の小里ふ茅か描てん 為家
新後拾
あそ川野の葛はを忘その陽るゝ宵やそ川〜と寄の命ハ 家之孫嫡
新拾
あ〜〜坂の名れ祢をそく成ふ名ふ軒寄かるあ川の京 秋門の法師
拾玉
栗はのくおそハ風ゆ萩ゆて身はる寄を置ゝ名ふ 慈円

栗津杜 陽所の城ゆあ〜〜ぐ名巳新陽所四社の杜とてあるべし
栗はの陽水ハ陽水とて名
伝源
閑あそくあ名川の杜乃あハにも清水ふみ〜〜新を寄るか 後鳥羽
栗津里 ちれも城下ふあ〜〜ぐ名まへ陽所
五ケの左れ村里をてあるべし
新勅
東海の野ちれ茅をの寄志ゆをけるる上累 猪子内親王家歌は
ゆ
閑のあ〜〜夜をふ吹やさ波のあそ川の里ゆ夜ら川を 基氏

兼平墳 栗は松原より西ふへ入津三町田圃の中ふ石塔あり
高四尺別今井四郎兼平と銘ゞ

東鑑曰
壽永三年正月九日蒲冠者範頼源九郎義経
等為武衛御使卒數萬騎入洛是為追罰義仲
也今日範頼自勢多参洛義経入自宇治路木
曾以三郎先生義廣今井四郎兼平已下軍士
等於彼両道雖防戦皆以敗北蒲冠者源九郎
相具河越太郎重頼同小太郎重房佐々木四
郎高綱畠山次郎重忠澁谷庄司重國梶原源
太景季等馳参六條殿奉警衛仙洞此間々一条
次郎忠頼已下競走于諸方遂於近江國
粟津邊令相摸國住人石田次郎為義仲兼
平其外錦織判官等者逐電云云

今井四郎兼平 姓中原信州の産兼遠が子ゝ義仲信州ふ流落の時兼遠
接育して忠肝義膽と專ら義仲遥ふ義兵を挙ゝ都ふ入兼平も従軍
しゝ勇威を奮ゝ義仲遠勅ふよりゝ範頼義経追討の院宣を蒙り東軍
洛ふ入ゝ攻戰ゝ京ふ義仲の陣敗亡勢田の橋を固ゝ兼平ゝ先生と称らんゝ為
ちに為る兼平も亦味方の存亡を案ゝ主君ゝ遇人
貝喜び貝哭く散兵ゝ疲屢戰ゝ半巌上の電の如し後ふ敗走ゝ義仲も

4年 6月

戰死し又は兼采し防戰の御畫く太刀の切先を口ふ含み馬より逆さまに墮ちて其身を殺し忠義家侍左傳あり忠臣仕ふ君に死し顏色變ぜず韓成が身を殺し

仕ふ忠臣に死し顏色變ぜず韓成が身を殺し

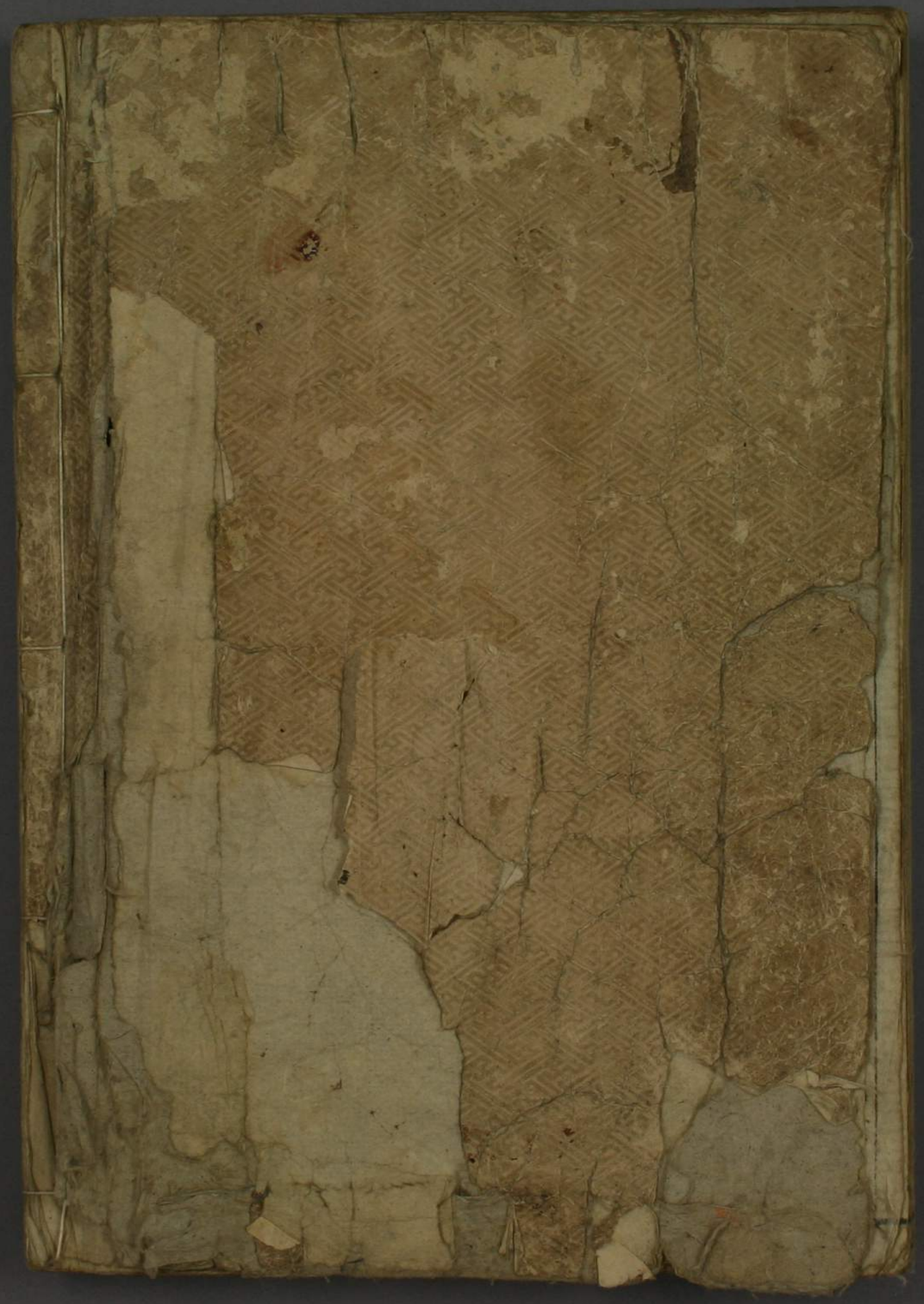
仕ふ君に死し顏色變ぜず韓成が身を殺し

仕ふ君に死し顏色變ぜず韓成が身を殺し

仕ふ君

戦死し多くの兵卒も防戦の術盡く太刀の切先とはふ合こと馬より墜ル時ハ
自戦に禮記ハ曰人の臣たるものハ其身を殺して忠成家傳左傳ハ忠者
人の望なり宋の文天祥ハ忠ハ死しく顔色変ぜず韓成ハ身を殺し
て忠を尽ム遥ハ祠を廟ハ建るハ遠く後世英名を賞せる事豈遺恨ならんや

東海道名所圖會卷之一　畢

右六冊

東街道分間